

試し読み

Beautiful wife

ビューティフル ワイフ

寝取らせ

綾

乃

N T R

鼻鎚提灯丸

はなかぶら ちょうちんまる

この作品は諸事情により、一部内容を変更し、DLsite 版として発売しております。

具体的には、本作の P46 の一部分をカットしておりますが、全体的な内容には影響の少ない部分だと思えます。

予めご了承ください。

宇海修二は自室にこもってパソコンの前に座っていた。

休日と言えばネット三昧で、それもアダルトサイトばかりを見ている。

それというのも、妻の綾乃は性への関心が皆無で、セックスは子供を作るための行為としか考えておらず、新婚二日目までに二回のセックスをして以来、三年間もセックスレスなのだ。

綾乃とは駅の構内で出会った。

大学進学のために上京してきた綾乃が、付き添いの母と二人で何かを探しているところへ、修二が声を掛けた。

特に他意は無かったが、駅員やタクシー乗り場まで出て運転手にでも尋ねればいいものを、二人はヨレヨレの紙一枚とにらめっこしていて、その様子に何だか放っては置けなかったのだ。

修二は、C町へ行きたいという母へバスを勧め、お礼を言われたときに、初めて正面から綾乃の顔を見て、ドキッとした。

どこかのアイドルや女優など、勝るとも劣らない整った魅力的な顔立ちをしていたからだ。

——芸能界にデビューでもするのかな。

バスに乗り込む際、振り返って会釈をした綾乃を見て、修二はそんなことを考えていた。

大学のキャンパスで、声を掛けてきたのは綾乃の方であった。

ベンチに座ってぼうっと遠くを眺めていた昼休みに、

「先日はありがとうございました」

と声を掛けられ、見上げると綾乃が立っていた。

そう言えば友達から、今年の一年生にはとても美人な子がいるらしいという話は聞いていたが、それが綾乃の事だとすぐに悟った。

「同じ大学だったんだね」

「はい。今後ともよろしくお願いします、先輩」

そう言って立ち去る綾乃の後ろ姿も、また美しかった。

三年生の修二は、創作ダンス部に所属していて、もっともそれは裏方だったのだが、そこに綾乃が現れた。

綾乃は、幼少期から高校生までクラシックバレエを習っていたのだが、大学にはクラシックバレエ部は存在していなかったのも、何となくそれに近い創作ダンス部を選んだそうだ。

修二の顔を見ると驚いたように、

「先輩も同じサークルなんですね！」

と言って、微笑んだのが印象的だった。

綾乃へは、いわゆるモテ男がたびたび現れては、猛烈にアプローチをしていたようだが、振られたという話しか聞かなかった。

やがて、他に好きな人がいるのだろうと噂になっていたが、修二は無関心を決め込んでいた。

自分の顔は不細工とは思わないが、だからと言ってカッコいいとも思えない。そんな自分がモテモテの綾乃にアタックをしたところで、結果は見えているからだ。

それに反して、綾乃は修二によく話し掛けてきた。

最初は、単なる可愛い後輩として言葉を返してきたが、言葉を交わし続けるたびに、綾乃に強く惹かれる自分を感じていた。

それでも修二は感情を封印した。

告白して振られて、今の仲良しの関係が壊れることが怖かったからだ。

ところが、秋祭のイベントで、ミスキャンパスに綾乃が選ばれたとき、そんな封印はあっさりとは決壊した。

それから一週間後、創作ダンスの大会で遠征した地方の旅館で、裏方の修二がひとり練習後の後片付けをしていると、綾乃がやってきて、修二を手伝った。

「いいよ。ダンスで疲れてるだろう？」

「ううん、全然平気です」

「あんまり俺に優しくするなよ」

「どうしてですか？」

「……す、好きになりそうだからだ」

修二が半分冗談めかして言うと、綾乃は、

「じゃあ好きになってください。わたしは好きですよ。先輩の事」

と言って、頬を赤らめた。

修二にしては夢のようだった。

誰もが憧れる綾乃が自分の彼女になる。

つまりそういう事だ。やがては、綾乃を抱けるのだ。

しかし、そんな期待とは裏腹に、交際三ヶ月を過ぎても、綾乃はキスさえ許してはくれなかった。

一年が経ち、修二の就職が決まった時、二人でお祝いをした。

その時初めて綾乃が一人暮らしの修二の家に来たので、思い切って綾乃を押し倒してみると、

「子供は結婚してからじゃないとだめ」

と拒否された。

結婚するまではバージンを貫き通す。

そんな綾乃もまた魅力的だと修二は思った。

修二が勤める会社は、小さな会社ではあったが、社長が気風の良い人で、給料は大企業にも負けないほど이었다。

それも手伝って、社会人二年目にして、大学を卒業したばかりの綾乃にプロポーズをし、晴れて二人は結婚することとなった。

新婚初夜は、バリ島のホテルであった。

綾乃は明かりを嫌い、それでも何とか説得をして、枕もとの小さなランプの明かりの中、初めて綾乃を抱いた。

綾乃は予想通り痛がったが、想像以上に我慢強く、時間をかけて何とか挿入を果たした。

綾乃は無反応のまま、ただ修二の顔を見ていた。

「どうしたの？」

と聞いても、にっこりとほほ笑み返すだけだった。

イキそうになり、引っこ抜いてお腹の上に射精すると、綾乃の顔色が変わった。

「どうしてお腹の上に出したの？ それじゃあ赤ちゃんできないでしょ？」

「子供はまだいいだろう？」

「ええっ！？ 子供も作らないのにこんなことしたの？」

「そりゃあ、夫婦なんだし……」

「信じられない。子供を作らないならもうしない」

綾乃はそう言うと、険しい顔をしてバスルームへ入っていった。

セックスは子供を作るための行為であって、愛を確かめるならキスをすればいい。

それが綾乃の性に対する考え方であった。

保健体育や性教育を、まっすぐに受け止めた結果なのかもしれない。

さらには、綾乃が不感症なのも原因の一つだろう。

クリトリスを指先で優しくこすっても反応はしないし、口での愛撫はさせてさえくれなかった。

翌朝、綾乃は不機嫌であったが、

「今日は子供を作るから」

と言うと、一気に笑顔になった。

子供なんて、そう簡単にできるものではないだろうし、妊娠するまでの間に、綾乃の性を開発していけば、きっと一般的な夫婦生活ができるはずだ。

夜が来て、綾乃との二回目のセックスが始まった。

綾乃は相変わらず無反応で、修二が綾乃の秘肉を口で愛撫しようとして下がろうとすると、綾乃はそれを拒んだ。

「だって汚いし恥ずかしいもん」

綾乃は頑なだった。

まるで古い時代のドラマの濡れ場シーンのように、ほとんど抱き合ったまま、修二は挿入し、そして中で果てた。

「これで赤ちゃんができるのね」

綾乃は、笑顔でお腹を撫でて見せた。

三日目の夜、ベッドに横になる綾乃に覆いかぶさろうとすると、綾乃は修二を拒んだ。

「どうした？」

「だって、赤ちゃんがいるのに、そんなことする必要は無いでしょ？」

綾乃は昨日の一晩だけで、妊娠したと信じ込んでいた。

だが、修二は何も言えなかった。

きっとそのうち、妊娠していないことがわかれば、また夫婦関係は持てる。

そしていよいよ本当に妊娠するまでに、綾乃は性に目覚めるはずだ。

新婚旅行の後半は、綾乃にキスをするだけで終わった。

日常生活に戻り、三週間が過ぎた頃だろうか。ある日、仕事から帰ると、綾乃が玄関に駆け寄ってきて、体温計のようなものを目の前に突き出してきた。

「ねえ、見て見て。妊娠したよ」

それは、妊娠検査薬だった。

修二は手に取って確認したが、確かに妊娠を表すマークが出ていた。

——まさか、あの一晩だけで本当に妊娠するなんて。

修二の顔は、きっと引きつっていただろう。しかし、綾乃は喜びの余りか、それに気づかずに抱き付いてきた。

やがて娘が産まれた。子供が生後半年を迎えた頃に、綾乃を誘ってみたが、

「二人目はまだいらないよ」

と予想通りの返事が戻ってきた。

子供が一歳になった時には、

「子供はひとりでもいいんじゃない？」

とまで言い出した。

もう二度と、綾乃を抱くことは無いかもしれない。

修二は欲求不満を解消するために、二階に自室を設け、そこにベッドを置いて寝室を分けた。

インターネットを開けば、自慰行為をするために必要なネタは、いくらでも見つかる。しかし、だからこそ、すぐに見飽きてしまった。

都市伝説だと思っていた、『婦人科の医師は女性器を見ても興奮しない』という噂は、本当だと思っているほどだ。

画像では抜けず、映像でもよっぽどのシチュエーションでなければ使えない。素人と謳っていても、アングルを気にしながらカメラ目線でフェラチオをしているシーンを見ると、すべてが台無しになった。

ネタに尽き、何かないかと考えていると、高校生の頃、友達から借りたポルノ雑誌に掲載されていた、官能小説を思い出した。

思春期の頃は、それで結構興奮したものだが、無修正画像が見放題の今、果たして興奮できるだろうか。

それでも、ものは試しとネットで検索をかけてみると、無料で読めるものが結構出てきた。

『名作』という単語でさらに絞り込み、出てきた作品を読んで、修二は衝撃を覚えた。

それはいわゆる、『寝取りもの』と呼ばれるものであった。

登場人物のヒロインに綾乃を重ねて、修二は胃が痛くなるほどの興奮を覚えた。

少しの間は、それをネタに欲求を解消してきたが、やがてそれも飽きてしまった。

たくさんの作品を読み、時には有名な作家の作品を購入して読んだこともあったが、結局は修二の欲求を満たすものにはなりえなかった。

そこで、『寝取り』というキーワードで検索をしてみると、興味の惹かれるサイトが目についた。

「大切なあの人を乱れる姿を見てくださいませんか？」

どうせ詐欺だろうと思いつつも、修二はそのサイトにアクセスした。

「大切な奥様、大切な彼女、憧れのあの人を、合法的に口説き落としてハメ撮りし、DVDにてお送りします」

黒い背景に、真っ赤な文字でそれだけが書かれており、下の方にはメールのアイコンが回転している。

もちろん、そんな胡散臭いところにメールをするつもりはない。

ただ、もしも綾乃が赤の他人に口説き落とされ、ハメ撮りされたら……と考えると、それだけで心臓は締め付けられ、胃が痛くなり、股間ははちきれんばかりになった。

想像だけでも十分だ。

修二は三日連続で、このサイトを眺めながら、綾乃を思って抜いた。

しかし、当然のようにその興奮も、日増しに薄れていった。

その頃から、メールアイコンをクリックしては、出てきたメール作成画面を閉じるという行為を繰り返し始めた。

七日後の日曜日、ついに修二はキーボードを叩いた。

はじめまして、私は関東在住なのですが、

妻を口説いてもらえるのでしょうか？

具体的にはどのような方法で行われるのでしょうか？

書いては消し、また書いては消した。

送信ボタンにマウスを重ねては、外して閉じるボタンを押す。

そんなことでさえ興奮を覚えていた修二であったが、とうとう送信ボタンを押してしまった。

メールはフリーメールで、個人を特定されることは無い。

相手から返信があっても、怪しい相手であれば、もうそのメールを使わなければいいだけだ。

その安心感が、罪悪感を薄れさせていた。

新婚旅行のバリの海で撮った、綾乃の水着姿の写真をパソコンの画面に映し出した。

色気もなにもない競泳用の紺色のセパレートタイプの水着写真だが、その写真を見ながら、いきり立った息子を二度三度こすり上げるだけで、発射してしまった。

今まで、これほどまでに興奮を覚えたことはあっただろうか。

下半身がガクガクと震えていて、トイレに向かう階段を落ちそうになった。

翌朝になって、朝食を用意する綾乃を見た瞬間、心臓が大きく高鳴った。

罪悪感などではない。これはあきらかなトキメキだ。

あまりの興奮に、食欲さえない。

バタートーストを一齧りするが喉を通っていかず、ミルクティーで流し込んでから、スクランブルエッグだけをかきこんで、さらにミルクティーで流し込んで

だ。

「ごちそうさま」

「もういいの？ 修ちゃん大丈夫？」

「体調は問題ないよ。今朝はやけに喉が渴くんだ」

修二は、残りのミルクティーを一息で飲むと、身支度をして家を出た。

出勤途中の電車でもワクワク感は収まらず、女子高生のミニスカートから覗く太ももでさえも、今の修二にはただのオブジェでしかなかった。

あの業者からの返信が、今にも来ているかもしれない。

パソコンメールを携帯でチェックするように設定していなかったことを、今更ながらに後悔した。

仕事でもソワソワしていたが、それが幸いしてか、むしろ仕事は順調だった。

家に帰れば楽しみが待っている。それだけでも仕事に張り合いが持てた。

帰りの電車では、さらにワクワク感が増していた。

向かいの席で居眠りをするOLのタイトスカートから、白いパンティーが覗いているが、そんなものはどうでもいいほど、早く家に帰ってメールを確認したかった。

それでも駅からの道のりは、いつもの歩調で歩いた。メールを送ったことなどばれるはずもないのに、いつもと違う何かを綾乃に感じられてはいけないという思いに駆られて、速足になりそうな自分を制した。

「ただいま」

「お帰りさない。いつもより少し早いよね」

綾乃の声を聴いただけで、胸がキュンと痛くなる。

食卓に皿を置きながら、時計を見上げる姿に股間が熱くなった。

「トイレに行きたくてさ。駅のトイレが使えなくて速足で帰ってきたんだ」

トイレに駆け込んで腕時計を見ると、いつもより十分も早い。自分を制して歩いていたつもりなのに、どうやら相当速足になっていたようだ。

すぐにでも自室に行ってパソコンを起動させたかったが、不自然である自分を嫌った。

いつも通りに食事を取り、いつも通りに風呂に入ってから、いつも通りに自室へと向かった。

早速パソコンを立ち上げて、メールソフトを起動した。

受信音とともに、複数のメールが流れ込んでくる。

ほとんどが迷惑メールの類であるが、その中に希望を見つけた。

【送信先：エントラップカンパニー】

【件名：お問い合わせありがとうございます】

「きた！！」

修二は右手で拳を握りしめながら、声を押し殺して叫んだ。

このたびは、お問い合わせありがとうございます。
エントラップカンパニーの三宅と申します。

早速ではございますが、まずは弊社からお約束をさせていただきます。

- ①強引なやり方でのDVD作成は致しません。
(脅迫・レイプ・薬物等の法律に抵触する行為は一切行いませんし、ご希望がございましてもお断りさせていただきます)
- ②個人情報はず守ります。
- ③作成したDVDの複製・横流し等は一切致しません。

次に、今後の事についてのお話です。

●必要な情報について

- ①奥様の名前、年齢、顔写真（契約時にご提示願います）
- ②奥様の普段の行動範囲（作戦を立てるために必要です）
※尚、ご主人様から、ご希望のシチュエーションがございましたら、リクエスト願います。（ナンパ・マッサージ等）

●料金について

- ・手付金10万円（活動開始後請求）
- ・成功報酬20万円（DVD料含む）
- ・その他諸費用として実費をご負担いただきます。（領収書にて清算）

以上です。

何卒よろしくお願い致します。

エントラップカンパニー
代表取締役 三宅一馬

修二の鼓動が高鳴った。このまま気絶しても不思議ではないほどの高鳴りだった。

トランクスが冷たくなっている。すでに先走り汁でいっぱいなのだろう。だが、その興奮とは裏腹に、綾乃の情報を提示したいとは思わなかった。罪悪感。そして恐怖心。

綾乃を寝取ってほしいという願望はあるが、誰もが見惚れるほどの美しい綾乃が、どこの誰ともわからない男に抱かれるのは嫌でもある。

下手に情報を出して、レイプでもされたりしたら、それこそ最悪だ。

そう考えてみると、興奮は一気に覚めてしまった。

修二は、間違いなく妻の綾乃を愛している。

綾乃も、セックスは頑なに拒んではいるが、修二を愛していることは事実であろう。

修二は、実際には依頼しないと決めて、エントラップカンパニーを相手に、仮想的に興奮を得ることにした。

エントラップカンパニー
三宅様

さっそくのお返事ありがとうございます。
御社のお約束事項を読みまして安心しました。
個人情報の開示も、契約時で良いとのことですので、
妻の年齢が26歳とだけ、お伝えしておきます。

妻は専業主婦をしておりますので、買い物以外であまり外に出ることがありません。

サークル等の活動もしておりませんし、
友達も多い方ではありませんので、
まず接触が難しいかもしれません。

また、妻は性に対してかなり消極的です。

セックスは子作りのためだけの行為と考えているようで、
旦那である私でさえ、付き合い始めてから2回しか、
性交渉を行っておりません。

2回目の性交渉で子供ができてからは、

完全なるセックスレスです。
妻は、母親になってしまいました。
ナンパに付いていくとは到底考えられません。
マッサージは、少し可能性があるかもしれませんが、
マッサージ師さんの手が、妻の胸やアソコに触れた瞬間に、
激しく抵抗される可能性が高いですし、
性格的に芯の強い部分もあり、
そこから大問題へと発展する危険性さえあります。
他に、どんな手があるか知りたいです。
よろしければ、教えてください。

質問があります。

>手付金10万円（活動開始後請求）

この部分の詳細をお教えてください。

綾乃の年齢。性に対して無関心なこと。自分とのセックスの回数。そして、どうやって綾乃を口説き落とすのか。

書いているだけで、股間はギンギンになった。

送信ボタンを押して、綾乃の他の写真をパソコンに並べてみる。

新居に越してきたときに、記念にとったエプロン姿の綾乃。

この綾乃が、他の男に抱かれるかもしれない。

それを妄想しながら、まさに三擦りほどで射精してしまった。

頭の中がすうっと冷えて行き、少し冷静さを取り戻した。

「ありえない、ありえない」

そう呟きながらも、修二の鼓動は再び高まるばかりだった。

翌日も仕事から帰ると、あくまでも平静を装って、いつもの時間に自室に駆け込んだ。

すぐさまパソコンの電源を入れて、メールソフトを立ち上げた。

妻を愛するご主人様（今後どのようにお呼びすればよいでしょうか？）
エンタラップカンパニー、三宅でございます。

奥様の性に対する考え方。確かにこれは難関そうですね。

しかし、だからこそ、崩し甲斐があるというものではないでしょうか。

私どもには、いくつもの作戦があり、実績もあります。

正直なところ、奥様を崩せる確率は10%以下と考えておりますが、ぜひ、私どもにやらせてはいただけないでしょうか。

手付金10万円についてですが、奥様と弊社担当者が連絡を取り合える関係になった時点で、ご請求させていただきます。

例えば奥様をモデルやモニターとしてスカウト出来た時点で、お支払いいただきます。

『ナンパ即ハメ撮り』ができた場合は、これに成功報酬を合わせますので、30万円のご請求となります。（今回はその可能性は低いですが……）

奥様にお声を掛けさせていただく瞬間から、事のすべてを録画・録音致します。

逐一、状況を報告する形で、これらデータをご主人様へお送りいたしますので、その費用と思っただけだと幸いです。

これまでに、ハメ撮りまで至らないケースは数件ございましたが、皆様、「10万円分の価値はあった」と喜んでいただいております。

さて、ご主人様にとって、私どもの正体が不明な点は、不安材料なのではないでしょうか。

今週末にでも一度お会い致しませんか？

顔を合わせて話し合いを持ちたいと考えております。

もちろん、契約をするかどうかは、ご主人様の自由です。

会ったからと言って、契約を結べというものではありません。

私どもを見ていただければ、ご主人様も安心して、ご依頼できると考えております。

よろしければ、希望日時と場所をご指定ください。

良いお返事を、お待ちしております。

エントラップカンパニー
代表取締役 三宅一馬

修二は全身を震わせていた。
怖いのではない。猛烈に興奮を覚えているからだ。
綾乃をナンパで口説き落とすのは、不可能に近いだろう。
美し過ぎるその容姿から、学生時代は街を歩けば必ずナンパされていた。
しかし、たったの一度だって、誰かについていったことは無い。
きっと、ナンパを交わすテクニックなら、人並み以上のはずである。
だが、モデルとしてのスカウトなら、可能性は十分に考えられた。
学生時代ではあるが、綾乃は実際に一流ファッション誌の読者モデルにスカウトされ、引き受ける気まんまんであった。
その時は修二が強く反対をして、綾乃は泣く泣くあきらめてくれたが、ずいぶん後ろ髪をひかれていたのを今でも覚えている。
二十六歳になり、すっかり母となった綾乃ではあるが、例えば奥様系雑誌のモデルと称してスカウトすれば、可能性は十分にありそうだ。
またしても心臓が限界付近まで高鳴っている。
気が付くと、修二はキーボードを叩いていた。

エントラップカンパニー
三宅様

私の事は今後、ウナバラと呼んでください。
ハンドルネームですが、よろしく願います。

三宅様とご対面するのは少々度胸が要りますが、モデルとしてスカウトするパターンがあることを知り、それなら妻も動く可能性があると思い、一度会ってみることを決意いたしました。

希望日は、今週の土曜日。午後1時。
場所は、刃金駅前にある喫茶『モジュラー』はいかがでしょうか。

刃金駅は、修二が住んでいる最寄駅から三つほど離れた駅になる。

相手が危ない人間でも、自分の家を特定されにくくするために、あえて遠くを指定した。

刃金駅周辺はあまり詳しくはないが、いつも通勤途中に喫茶『モジュラー』の看板を見ていたので、そこを指定した。

三宅という男と会うことに不安はあるが、印象が悪ければ断ればいい。

修二は、綾乃が赤ん坊をあやしている写真をパソコンに映した。

前かがみになっているので、胸元が大きく開き、ブラジャーに包まれたDカップの谷間が映し出されている。

三日連続、綾乃で抜いた。

それでもなお、興奮は冷めやらない。

明日のメールが楽しみだ。修二はいつまでも寝つけなかった。

翌日、修二は少し寝不足であったが、パソコンを見ただけで心臓が高鳴り、すぐに頭がハッキリとした。

朝食の支度をしている綾乃を見るだけで、股間は熱く硬くなっていた。

勃起がばれないように、パジャマのズボンに手を入れて、トイレに駆け込んだ。綾乃と他愛もない会話をしているのにドキドキする。

綾乃と最初に出会って話した、あの時の緊張感とも似ているが、それを遥かに凌いでいる。

通勤電車で揺られながら、喫茶『モジュラー』が視界に入ると、またしても心臓が高鳴った。

土曜日が待ち遠しい。

仕事をしながらも、終業までドキドキしていた。

いつもは、帰りの電車では、悪い癖でその日一日の仕事の内容を思い返すのだが、今日はどういう仕事をしたのかまるで覚えていない。

帰宅して、平静を装って食事し、風呂を済ませ、パソコンの前に座った。

メールが来ている。

ウナバラ様

エントラップカンパニー、三宅でございます。

ご対面のご決断、ありがとうございます。

刃金駅は弊社からも近くでございますので、

土曜、午後1時、喫茶『モジュラー』でお待ちしております。

目印と致しまして、『プロジェクトコンサルティング』という社名の入った紙袋をテーブルの上に置いておきます。

どのような紙袋かは、添付した画像でご確認ください。

万が一、ウナバラ様が先にお着きの場合には、お手数ですが携帯まで連絡をお願い致します。TEL.000-0000-0000

さて、奥様はモデルとしてのスカウトなら、可能性があるということですね。

幸い弊社は、撮影スタジオを所有しております、出版関係・芸能関係の方にもご利用いただいております。

スカウト後、ホテルで撮影というAVのようなことはございませんので、奥様を信用させることは容易かと思われまます。

それでは、土曜日にお待ちしております。

エントラップカンパニー

代表取締役 三宅一馬

「凄いな……」

修二は思わず声に出してつぶやいた。

本物の撮影スタジオがあるなら、綾乃はまず疑わない。

仮にハメ撮りとまでは行かなくとも、綾乃が他人の男の前でポーズをとり、或いは、きわどい水着や下着姿にまでなってくれるかもしれない。

そうだ。ハメ撮りというのは無しにして、水着や下着撮影までを最終目標とすればいいのだ。

憧れだったモデルの体験チケット。

自分は綾乃に、それをプレゼントするのだ。

修二は自分にそう言い聞かせて、キーボードを叩いた。

エントラップカンパニー
三宅様

メールありがとうございます。ウナバラです。

本物の撮影スタジオも運営されているんですね。
正直驚きましたが、おかげさまで面会する気持ちが固まりました。
土曜日、よろしく願いたします。

待ちに待った土曜日がやってきた。

——土曜日まで長かったなあ。

電車の中の修二は、意外に冷静であった。

刃金駅で降りて時計を見ると、時刻は十二時四十五分を少し回っていた。

約束の時間まで十五分もあるが、駅に降りた途端なんだか落ち着かなくなっ
て、とりあえず喫茶モジュラーに入った。

すると、店の一番奥の席に、画像で見たプロジェクトコンサルティングの社名
が入った紙袋が見えた。

修二は迷わず席に向かい、アイスコーヒーを飲んでいるスーツ姿の男の前に
立った。

「あの、ウナバラですが」

「お待ちしております。初めまして、三宅です」

三宅はすっと立ち上がると、深々と頭を下げた。

修二の身長は一七五センチだが、三宅も同じくらいだった。

第一印象は、清潔感のあるスラッとした好青年で、修二は好感が持てた。

「さあ、どうぞおかけください」

「はい」

修二が席に着くのを確認してから、三宅も席に着いた。

ああいうサイトを作っているのだから、ろくでもないやつだろうとどこかで
思っていたが、礼儀はきちんとしていて、少し安心した。

ウェイトレスがやってきたので、修二はアイスコーヒーを頼んだ。

「奥様はお元気ですか？」

三宅が聞いた。

「ええ、相変わらずです」

「結婚してから何年経ちますか？」

「今年で三年目です」

「まだまだ新婚さんですね」

「ええ、まあ」

修二は、テーブルのコップに手を付けた。

「アイスコーヒー来ましたよ」

三宅は、アイスコーヒーが運ばれてくるのを待っているようだった。

たしかに、こんな計画をしているところに、ウェイトレスが来てはバツが悪い。

アイスコーヒーが置かれて、ウェイトレスが立ち去ると、三宅はすぐに切り出した。

「まずはウナバラ様に謝らなければなりません」

「どうかされましたか？」

「私の名前は三宅ではありません。本当の名前は、篠塚和夫と言います」

三宅はそう言うと、ハンドバックから免許証とパスポート、そして健康保険証まで取り出して、テーブルに並べて見せた。

「どうぞご確認ください」

「では、遠慮なく」

修二は免許証を手にした。確かに、篠塚和夫という名前とともに、目の前に座る男の顔写真があった。

会っていきなり自分の素性を晒した三宅に、修二の警戒心は限りなく小さくなっていた。

「今後は私の事を篠塚と呼んでください。三宅はいわばハンドルネームですので」

「はい。わかりました」

「ウナバラ様はウナバラのまま構いません。本名が必要になった時に、お教えください」

「ええ、すみません」

「謝ることはありませんよ。状況が状況ですからね」

篠塚はそう言うと、ハハハと笑って見せた。

「ところでウナバラさん。今日はお時間ありますか？」

「ええ、特に用はありませんが」

「ここで今後の事を話すのもなんですので、とりあえず出ませんか？」

「別にかまいませんが」

「では」

篠塚はそう言うと、テーブルの上の免許証などをハンドバックにしまい込んで、伝票を手に取りレジに向かった。

修二は立ち上がりながら、アイスコーヒーを二口、三口飲んで後を追った。「こちらです」

篠塚は、駅とは反対方向に向かって歩き出した。

付いて行くと、そこには立体駐車場があった。

一階の出口のすぐそばに、真っ赤なスポーツカーが止まっていた。

「どうぞ」

篠塚の促すまま、修二は助手席に乗った。

駐車場を出ると、すぐに篠塚が口を開いた。

「私は元大手商社に勤めていたんですよ」

「そうなんですか？」

「〇〇会社ってご存知ですか？」

「もちろん知ってます。当時は毎日のようにニュースで見ましたよ」

「ええ、ご存じのとおり経営悪化のために、大規模なリストラがありましてね。私も運悪くリストラにあってしまったんです」

車は信号を右折する。修二の家から離れていくことに、修二は少しホッとした。篠塚が続けた。

「リストラにあった仲間と、起業しようと思ひましてね。でもこのご時世、隙間産業しか成り立たない。それならば法律に触れないぎりぎりの線で、この仕事をやってみようと考えたわけです。まあ、正直なところ、私の趣味でもあるんですけどね」

篠塚はそう言うと、修二の方を向いてニヤリと笑った。

「篠塚さんご結婚は？」

「独身ですよ」

「先ほど免許証を見せてもらいましたが、三十八歳ですよ？」

「ええ、計算が早いですね」

「いいえ、私が二十八歳なので、計算が簡単でした」

「ああ、なるほど。三十八歳で独身は、辛いものがありますよ。まあおかげで、こういう仕事ができるんですけどね」

篠塚は、わずかにほほ笑んだ。

十五分程走っただろうか。車は住宅街に入ると、立派な住宅の前に止まった。

電動シャッターが開き、車をバックで入れると、

「ウナバラさん、すみませんが、玄関から入ってもらえますか？」

と言って、篠塚は車庫の中にある白いドアから家に入っていった。

修二は外へ出て玄関に向った。

表札には、
『プロジェクトコンサルティング 代表取締役 篠塚和夫』と書かれている。
ガチャッと音がしてドアが開いた。
「どうぞ」
篠塚に導かれて、修二は玄関に上がり込んだ。
玄関には靴が三、四足並んでいる。
出されたスリッパに履き替えて、篠塚について地下に降りた。
鍵を差し込みドアを開けると、そこはスタジオだった。
「ここが例のスタジオです。撮影機材はすべて揃ってます。貸出もしていますので、モデルさんとか芸能人の方もよく来られますよ。先週はファッション雑誌の方がご利用くださいました」
とても立派なスタジオだった。
修二は、他のスタジオがどんな風になっているのかは知らないが、少なくともこのスタジオを見て、怪しい撮影に使われるなど、微塵も感じさせないと思った。
「では二階へ行きましょう」
二階の部屋は六畳ほどの広さで、三つのデスクと、いくつかのモニターや機材が並んでいた。
その前には、黒縁のメガネをかけた男が座っている。
「彼は編集担当の笹本です。撮影したものはここで編集し、DVDに焼いてお客様にお渡しいたします」
篠塚の説明を待っていたかのように、笹本が、
「はじめまして、笹本です。よろしくお願ひします」
と椅子に座ったまま頭を下げた。
「ウナバラです。こちらこそ、よろしくお願ひします」
「彼もリストラ組です。私の元部下でして、仕事はできるやつです。編集の腕も超一流です」
「社長、褒めすぎですよ」
「そんなことは無い。君のその才能には正直嫉妬するよ」
篠塚はそう言うと、ハハハと笑った。実に気さくな男だと修二は思った。
「撮影スタッフと男優は、外に出ています。と言っても撮影しているわけではなく、経営コンサルタントをやっています」
「その方面の仕事もされているんですか」
「プロジェクトコンサルティングという会社は、言わば仮面のようなものなんです。エンタラップカンパニーという看板を掲げてしまうと、ネット社会ですから、検索されればすぐにあのサイトが出てきてしまう。そうなれば私はここに住んでいられません。仮面のつもりで付けた社名なんです、それを見て、コン

サルティングの依頼も来るんです。幸い、スタッフは皆、元大手商社マンですから、まあインチキはやってません」

ドアをノックする音が聞こえた。ガチャリと開くと、二十歳くらいの若い女性がトレーに飲み物を乗せて入ってきた。

「彼女もスタッフです。彼女はエステシャンとマッサージ師の資格を持っているんですよ」

「渡辺亜沙美です。どうぞ」

亜沙美がデスクに麦茶を置くと、

「どうぞお掛けになってください」

と篠塚が促した。

修二が椅子に座ると同時に、開いていたドアからゴツイ男が入ってきた。

「ただいま。あ、こんにちは」

ゴツイ男は修二を見ると、頭をペコリと下げた。

「彼がカメラマンです。写真撮影からビデオ撮影までなんでもこなします。彼は男優もします。体格に比例してあっちの方もゴツイですよ」

篠塚は、女性のいる前で堂々と言ったのける。

修二は驚いて思わず亜沙美を見たが、

「本当に凄いですよ。私は、岩木さん以上の人をまだ見たことがありません」と平然としていた。

綾乃がモデルの仕事を引き受け、もし、その先のことまで起こるならば、この岩木というゴツイ男が相手をすることになるかもしれない。

なんだか複雑な心境になったが、それに反して股間の方は早くも反応していた。

「ウナバラさん。私どもが見せられるのはここまでです。実行するかどうかはよく考えた上でご判断ください。折角ですので、実行すると仮定してお話を進めさせていただきますが、先日のメールから、奥様をスカウトする方向で考えています。スカウトマンは江藤が努めます」

篠塚はそこまで言うと、本棚からファイルを取り出して、修二に写真を見せた。笑顔の素晴らしい好青年だ。

「彼も商社マンで営業をしていました。口先が上手いのでスカウトマンとして活躍してもらっています。まずは架空の雑誌『ビューティフルワイフ』が創刊されるとして、そのモデルに奥様をスカウトします」

篠塚は、封筒から雑誌を一冊取り出した。

『ビューティフルワイフ』というタイトルがあり、いかにも記事らしい文章が並んでいるのだが、ところどころに写真が掲載されるであろうスペースがある。

「これは、奥様に見せるためのサンプルです。こういう雑誌ですよ、と信用させ

るために作りました。奥様がもし了承してくだされば、衣服での撮影を行います。その後、『エステ体験特集』とか『もっと美しく写るために』とか、何らかの理由を付けて、エステやマッサージまで受けさせることができれば、とも考えています」

「はい……」

修二は平静を装っているが、はち切れんばかりに勃起していた。

「その後の事は、流れの中で決めていきます。まずは奥様をスカウトすることから始まりますので、決心がつかましたら、奥様の写真とともに、いつも何時くらいにどこのスーパーマーケットに買い物に行かれるかを教えてください」

「わかりました。少しだけ考えさせてください」

修二の気持ちは半分以上決まっていた。

だが、本当に依頼をしてもいいものか。

愛する綾乃を他人に差し出すような行為をしてもいいのか。

まだ、ほんの少しだけ理性が働いていた。

近隣の駅まで送ってもらう最中、修二の頭の中は空っぽだった。

気持ちを察してか、運転する篠塚も無言だった。

車が駅に着くと、篠塚は口を開いた。

「それでは、良いお返事を待っています。メールで構いませんので」

「はい。今日はありがとうございました」

簡単なはずの車のカギに手こずってしまうほど、修二は虚ろだった。

篠塚が運転席のスイッチでカギを開け、修二は軽く会釈だけして車から降りた。

駅構内のベンチに座っている間、ぼうっと時刻表を眺めていた。

時間などは頭に入らず、アナウンスに流されるようにプラットフォームに出て、やってきた電車に乗り込んだ。

我に返り、進行方向を見て、自宅への帰路であっていると安心した。

いったいどうしたらいいのだろう。

綾乃を彼らに任せるというゲームは、最高の興奮を修二にもたらすことは間違いない。

しかし、だからと言って、自分が興奮したいがために、貞淑な綾乃を他人に差し出すような真似は、人としてはいかがなものか。

——そうだ。賭けをしてみよう。

今夜、綾乃を誘ってみて、セックスに応じれば依頼はしない。

セックスまではいかなくとも、キスまで行けたら下着の撮影程度までで止めてもらう。

もしも、そっけなく断られたなら、制限を付けずにすべてを託す。

考えてみれば、子供が生まれて最初に断られて以来、綾乃に迫ったことは無かった。

実は綾乃は、そろそろ二人目を作ってもいいと思っているかもしれない。

もしそうなら、修二はパイプカットでもすればいいのだ。

子供が出来ず、綾乃が拒みだすまでの間は、少なくとも夫婦生活を楽しむことはできる。

——決めるのは綾乃なんだ。

目の前に喫茶モジュラーが通り過ぎる。

三宅を名乗った篠塚の顔が浮かぶ。

彼らは好青年だ。仮に断っても先延ばしにしても、悪いようにはするまい。

賭けを決めると心が落ち着いてきた。

最寄駅から我が家までの徒歩での道のり、綾乃に何と言って夜を誘おうかとずっと考えていた。

しかし、結局は何も考えつかないまま、玄関を開けてリビングに上がると、

「あら、おかえりなさい」

と言って、エプロン姿の綾乃が笑顔で迎えてくれた。

「愛里は？」

「さっき寝たところよ」

いつもなら、娘の愛里の寝顔を見に行くところだが、洗い終えた洗濯物を持って縁側に出た綾乃に、修二はついて行った。

「手伝おうか？」

「大丈夫、これだけだから。今日はどこに行ってたの？」

綾乃は、慣れた手つきで洗濯物のシワを伸ばしては、洗濯バサミで留めていった。

「会社の同僚のところさ。新しいパソコンを買ったっていうから、セットアップしてきてやったんだ」

「五十嵐さんのところ？」

「いや、鈴木っていう今月入ってきた新人だよ」

「そうなの」

綾乃がリビングに戻って行った。

時間的にも、まだ誘うような雰囲気でもないので、修二は自室に戻った。

休みの日は、午後七時ちょうどに夕飯を食べることになっている。

いつもは、綾乃の声が掛かるまで自室にこもっているのだが、今日は六時半か

らリビングに下りて、夕飯の支度を手伝った。

愛里もすっかりお手伝いができる年頃で、修二の先頭に立って歩いた。

「今日はパパと一緒に、愛里も楽しそうね」

「そうだな。今度から休みの日には、一緒に夕飯の支度をするか」

「やったー！　パパが手伝ってくれるんだって」

「わーい！」

愛里は本当にわかっているのか、手を挙げて喜んだ。

「いただきまーす！」

食事をとりながら、修二はずっとドキドキしていた。

いつもの性的なドキドキではなく、綾乃が何と答えるのか、純粋な緊張のドキドキである。

料理の味などまるで感じない。食欲もないが残すわけにもいかない。

半ば麦茶で強引に流し込んで、何とか完食した。

後片付けも手伝おうとしたが、

「そこまでしなくてもいいわよ。今日はどうしたの？」

と言われたので、修二はリビングのソファに座ってテレビを付けた。

愛里が修二の膝の上に座ろうとしたので、さすがに今それはまずいと思い、抱っこして横に座らせた。

子供も二歳になって、ずいぶんと成長したものだ。そろそろ弟か妹を欲しがると時期である。

これも、綾乃を今晚口説き落とす材料になるだろう。

子供に触れていると不思議な物で、性欲は全く消えていた。

大して面白くもない番組を、ただぼうっと見ていると、愛里の頭が重く修二の脇腹に倒れてきた。

修二は、そっと愛里を抱き上げて、寝室の綾乃のベッドまで運んだ。

八時半になった。風呂の時間だ。

「綾乃、たまには一緒に入るか？」

と、無意識に言葉に出た。

「ええっ、なんで？」

「たまにはいいじゃないか」

「ええっ、やだよー」

綾乃はそう言うと、さっさと寝室に行ってしまった。

風呂から上がると、愛里が綾乃の腕の中でぐずっていた。

綾乃は愛里の歯磨きを絶対に怠らない。眠ってしまった愛里を起こして、ぐずらせてしまう光景も、もう見慣れてしまった。

修二は、綾乃の腕から愛里を抱き上げた。

「風呂に入っておいでよ」

「うん、じゃあ、あとはお願いね」

早足にバスルームへ消えてゆく綾乃の後ろを見送った後で、修二は愛里の背中をポンポンと軽くたたいて、あやした。

しばらくすると、愛里が眠りについた。

ベッドまで運んだところで、綾乃が風呂からあがってきた。

「愛里、寝た？」

「うん、たった今寝たよ」

「ありがとうね」

「綾乃」

「なに？」

「二人目は欲しくないの？」

「うーん、愛里の兄弟は欲しいとは思うけど、今はまだいいかな」

「いつ作る予定？」

「三歳は離したいかな。だから来年くらい？」

「だったら、今から子作りをしないと来年には産まれないよ？」

「あ、そっか。でも、何だか実感がわかないなー」

「なあ。たまにはエッチしないか？」

「エッチ？」

「そう、俺たち夫婦なんだし、愛し合うことも必要だろう？」

「私たち愛し合ってるでしょう？ 私、修ちゃんのこと愛してるわよ」

「俺だって愛してるさ。でも綾乃を抱きたいんだ」

「うーんごめん。私、エッチってあんまり好きじゃないかも」

「じゃあせめて、キスくらいはしようよ」

「うん、キスならいいよ」

綾乃が目をつむって少し上を向いた。

修二は唇を重ねて綾乃の背中に手を回し、右手は胸に伸ばした。

「待って」

綾乃は手を払いのけると同時に、修二から離れてしまった。

「おっぱいを触るのもダメなのか？」

「ごめんなさい。母乳マッサージを受けてから、なんだか気持ちが悪いの」

「母乳マッサージって、もうずいぶん前の事だろう？」

「うん。でも、助産師さんからマッサージされてた時のあの不快感が、まだ残ってるの」

「そっか。それじゃあ仕方がないね」

「ごめんね」

「こっちこそごめん」

修二は、綾乃の頭をポンポンと軽くたたいて引き下がった。

キスはできたから、下着姿までの依頼に留めよう。

ビキニ姿や下着姿まで撮らせてくれたら、当分のネタには困らない。

それだけで十万円は少々高いが、モデルとして活動したかった綾乃の記念にもなると思えば、出して出せない金額ではない。

修二は自室に戻るや否や、パソコンを立ち上げてメールを書いた。

エントラップカンパニー

篠塚様

本日はありがとうございました。ウナバラこと、宇海修二です。

考えに考え抜いた結果、覚悟ができました。

妻、綾乃を【例の作戦】にてよろしくお願いいたします。

妻は白歌地区を活動拠点としており、スーパー白歌でよく買い物をしており
ます。15時前後に買い物をしていることが多いようです。

妻の写真を複数枚添付いたしますので、よろしくお願いいたします。

ただし、くれぐれも強引なことはしないでください。

メールを送信してからハッとした。

下着姿までの撮影と制限を付けるのを忘れてしまった。

すぐに追加のメールを送ろうと思ったが、修二は手を止めた。

制限がなくなつて、こんな状態の綾乃が他の男に抱かれるなど、例え天地が逆
になろうと絶対にありえないことだ。

制限を付けなければ、綾乃を落とそうと交渉する様子も見られるだろうし、綾
乃が拒否反応を見せながらも、どこまでやってしまうのだろうというスリルも
楽しめる。

落ちるわけがないという確信は、修二にそんな余裕を持たせていた。

篠塚に送った綾乃の写真を見ながら、オナニーをしようと思った瞬間、メール
の着信音が鳴った。

もう返事が来たのかと、ドキドキしながら見てみると、出会い系サイトの迷惑

メールだった。

翌朝の日曜日、メールチェックをすると、待望のメールが来ていた。

宇海修二 様
エントラップカンパニー、篠塚でございます。

このたびは、ご決断ありがとうございます。
とても美しい奥様で、スタッフともども感動致しました。
さっそく本日から活動に移らせていただきます。
活動状況は、日々メールにてご報告させていただきます。

本日は日曜日ですので、もし、宇海様がお自宅におられるようでしたら、奥様が外出された際には、ご一報ください。

篠塚 TEL.000-0000-0000
スカウト江藤 TEL.000-0000-0001

エントラップカンパニー
代表取締役 三宅一馬

修二は一階のリビングへ降りて、所要を済ませて朝食の用意してあるテーブルに着いた。

先に座っている愛里は、スプーンでテーブルを叩いていて、修二を見るとニンマリと笑って見せた。

綾乃が残りの朝食を運んできて、正面に座った。

「ねえ、今日はマーガリンが安いの」

綾乃はいつも特売品があると口に出す。

「どこで？」

普段の修二なら、「へえ」と返事をするだけなのだが、今日は思わず聴いてしまった。

「サンセットマートよ」

サンセットマートは、スーパー白歌とは逆方向で、家から少し遠い。

スーパー白歌は小さなスーパーマーケットだが、サンセットマートはいわゆる大型量販店に近い。

「少し遠いだろう」

「うん。でも自転車だし、ティッシュとかトイレットペーパーも安いだよ」

「そんなに積めるのか？ 何なら俺も一緒に行こうか？」

修二は言ってから、しまったと思った。

修二が付き添ってはスカウトもなにもない。

「修ちゃんの自転車はないでしょ。平気、意外と積めるものよ」

綾乃が普段どうやって買い物をしているのか、修二はあまり知らない。

あの自転車に、どうやってティッシュペーパーとトイレットペーパーを積むのか、聴こうと思ったが言葉を飲み込んだ。今はそれどころではない。

「何時ころ行くの？」

「タイムバーゲンだから、二時半には家を出ると思う」

「そうか」

「何かあるの？」

「いや、なにもないよ。あっちの方は車通りも多いだろうから気を付けてね」

「うん、ありがとう」

綾乃の笑顔に少しだけ心が痛んだ。

朝食を済ませて、新聞を片手に自室に戻った。

そしてすぐに篠塚に電話を入れた。

『はい篠塚です』

『もしもし宇海ですが』

『ああ、おはようございます。昨夜はご決断いただきましてありがとうございます』

『いいえ、こちらこそよろしくお願いたします。それで今日の妻ですが、三時頃にはサンセットマートにいると思います』

『三時ですね。かしこまりました。今夜にでも報告のメールを入れさせていただきます』

『はい。楽しみにしております』

携帯電話を切った。下半身は意外にも反応していない。

夜までどうやって時間をつぶそうか。

いつも巡回しているアダルトサイトさえ見る気が起きない。

修二は部屋を片付けていた。

どちらかというところ綺麗好きで、部屋はわりと片付いているのだが、パソコン周りやアダルトDVDの整理をしたくなった。

それは、これから綾乃のDVDがここへ並ぶかもしれないという期待も、あったのかもしれない。

ピリリッ、ピリリッと部屋にあるインターホンが鳴った。

「修ちゃん、お昼よ〜」

「もう昼か。今行くよ」

整理に夢中になっていて時間を忘れていた。

リビングのテーブルの真ん中には冷麦が置いてあった。

「愛里は？」

「寝ちゃった」

「お昼は食べたのか？」

「うん、愛里は冷麦とかあまり食べないから、先に別な物を食べさせたの」

「そうか」

綾乃と二人で冷麦をすすった。

食べ終わるころに、少し熱いお茶が出てきた。冷え切った胃にやさしく染み渡る。

綾乃は本当によくできた妻だ。

才色兼備とはこのことを言うのだろう。

これで、夫婦生活にも積極的なら完璧だったのだが、実に惜しいものだ。

ソファに横になってテレビを見ていると、

「修ちゃん」

と声がしてハッとした。いつの間にか眠っていたようだ。

「これから買い物に行くから、愛里が起きたらお願いね」

「ああ、気を付けて行くんだよ」

修二は、綾乃を見送ってすぐに時計を見た。

時刻は、午後二時二十五分。ほぼ予定通りだ。

五分ほど待ってから篠塚に電話した。

『妻は五分ほど前に出かけました。ピンク色のTシャツにジーンズを穿いて行きました』

『その情報は大変助かります。ありがとうございます』

篠塚は車で移動しているのか、時折雑音が入ってくる。

『ではよろしく願います』

『はい、こちらこそ。では失礼します』

電話が切れた。修二の鼓動が強く早くなった。

愛里の面倒を見なくてはいけないので、リビングにいなければならない。

テレビをつけるが特に見たい番組もなく、ソファに横になって映像を眺めていた。

愛里は、寝起きこそぐずるが、とても育てやすい方らしい。

午前中にたっぷり遊んで、ご飯を食べて、今はぐっすり眠っている。

夕方までは起きないはずだが、それでも気を使ってテレビのボリュームは最小限にしている。

それが子守唄となったのか、修二はうとうとしてしまった。

バタンッ！ という音がして目が覚めた。

外で誰かが話をしている。

車が走り去る音がするのと同時に、綾乃が帰ってきた。

「おかえり。今、車の音が聞こえたけど」

「うん、買い物をしてたら、雑誌のスカウトの人が来てね。いろいろと話しているうちに、送ってもらっちゃったの」

「自転車は？」

「大きな車だったから、後ろに積んでもらったの。送ってくれるっていうから、ティッシュもトイレットペーパーも二個ずつ買ってきちゃった」

綾乃はそう言いながら、両手からぶら下がっていた荷物を玄関に置いた。

「ところで、雑誌のスカウトって何？」

修二の鼓動が高鳴った。

「なんかね、今度新しいファッション誌が出るんだって。奥様向けのやつで、そのモデルをやらないかって言われたの」

「へえ～」

修二は、今にも口から心臓が飛び出しそうであったが、平静を装った。

「名刺も貰ったのよ」

綾乃が買い物袋から名刺を取り出した。もっともらしい社名や肩書が並んでいる。

「モデルをやるの？」

「うーん、修ちゃんはどう思う？ 反対なんでしょう？」

修二はかつて、ファッション誌にスカウトされた綾乃に反対したことがある。

「怪しい雑誌じゃないのか？」

修二は敢えてそう聞いた。

「ううん、たぶん大丈夫。雑誌の見本みたいなのも見せてもらったけど、ちゃんとしてたわよ」

綾乃が疑う様子はどこにもない。確かにあの見本を見て、疑う人はいないだろう。

「それなら綾乃の好きなようにすればいいよ。あの時は反対したけど、今はもう夫婦なんだし」

修二は、夫婦なんだしという理由がおかしいとは思ったが、それしか言葉に出なかった。

「本当にいいの？　じゃあ考えてみるね」

綾乃は買い物の片づけを始めた。

修二は、意外と大きなおしりに触れたかったが、ぐっところえて自室に戻った。

メールが届いたのは、その日の夜八時頃だった。

夕食は報告メールが気になってあまり食べられず、綾乃に心配されたが、少し夏バテなのかもしれないとごまかした。

宇海修二　様

篠塚でございます。

早速ですが本日の成果をご報告いたします。

無事、奥様に声を掛け、名刺を渡すことに成功いたしました。

いまだ返事はいただいておりますので、スカウトに成功したとは言えませんが、好感触ではあると思われます。

その時の様子を撮影しておりますので、下記 URL にアクセスしご覧ください。

パスワードは ayanolove です。

http~~~~~

今回の映像はサービスとさせていただきます。

もし、奥様から良いお返事がいただけた際には、手付金を頂きますので、よろしく願いいたします。

修二は震える手でマウスを握り、アドレスをクリックした。
パスワードを入力すると、ストリーミング再生が始まった。

撮影は、車の中から車窓越しに撮っていると思われる。

男が女性と会話をしているが、綾乃ではない。

その真横を綾乃が通り過ぎた。男は一瞬、綾乃の方を見たが、構わず女性と会話を続けている。

映像が早送りになった。タイムカウンターが五分、十分と過ぎていく。

通常の速さに戻った。男はまだあの女性と話をしている。

女性が突然頭を下げた。その直後に綾乃が店から出てきた。

「では機会があればお願いしますね」

突然、男の声が聞こえた。

男が振り返ると、買い物袋とティッシュやトイレットペーパーを両手からぶら下げた綾乃に近づいて行った。

「あの、すみません」

「はい？」

綾乃が答えた。

「わたくし、こういう者なんです、ああ、お荷物が重そうですね。今日は何で来られましたか？」

「はい、これを買いに……」

綾乃は、少しだけだが天然なところがある。

「いいえ。移動手段は何で来られました？」

「ああ……、自転車ですけど」

「でしたら自転車のところまで移動しましょう。お荷物お持ちしますよ」

「いいえ、結構ですう」

綾乃は明らかに男を怪しんでいる。はっきりと断ってはいるが、語尾を伸ばすことで、柔らかい表現にするのは学生時代から変わらない。

「あははは、すみませんね。いきなり声をかけられたら、誰でも怪しく思いますもんね」

男は頭をポリポリと掻きながら、綾乃の後ろについて歩いた。

カメラが二人の動きに合わせて動く。

綾乃は自転車のカゴに買い物袋を入れると、後ろの席にティッシュとトイレットペーパーを紐で括り付けた。

綾乃はこういうことに疎いと思っていただけに、手際よく括り付ける姿に、修二は感心した。

「すみません。お時間はあまり取らせません。こちらは名刺です」

男は両手で名刺を差し出すと、綾乃はあっさりと受け取って、名刺に目を通した。

「今年の冬か来年くらいになると思うんですが、奥様向けの雑誌を創刊することになりまして、そのモデルさんを探しているところなんですよ」

「はあ」

「失礼ですが、ご結婚されていますよね？ 指輪、ありますもんね」

男は綾乃の手元を指さして言った。

「ええ、まあ」

「それで、今二十代から六十代までの奥様で、モデルをやったださる方を探しているんです」

「六十代の方までですか？」

六十代と聞いてか、綾乃の表情が少し和らいだ気がする。

「創刊特集で、各世代の奥様の普段着やオシャレ着がどういったものかを特集することになりまして、いわゆる読者モデルを探しているんです」

男はそう言うと、書類封筒の紐を解いて、例の雑誌見本を取り出し、綾乃に手渡した。

「謝礼は二、三万円の予定で少ないとは思いますが、ぜひお願いできないでしょうか？」

「普段着とオシャレ着って、自前ってことですよ？」

「そうですね。例えば今着ていらっしゃるお洋服は普段着ですよ。そのお姿と、オシャレして出かけるときのお姿と、あと、スポンサーさんに提供していただいた洋服を着ていただくこともあるかと思えます。まあ、だいたい三カット程度ですかね」

「そうですか」

綾乃はそう言いながら、手渡された雑誌見本をパラパラとめくった。

「まだ見本なんで、記事も少ないですが、例えばこういったところに写真が掲載されます」

男は綾乃から雑誌見本を取り上げると、ぱらぱらとめくってから、開いて見せた。

「うーん、今すぐには返事はできません。主人とも相談しないと」

「ええ、もちろんです。今すぐに返事を下さいとは言いません。二、三日は考えたださっても結構です。もしやっていただければいいようでしたら、こちらにお電話をお願いします」

「はい、わかりました」

「あの一、ちなみにですが、今のお気持ち的には、どのくらいの確率でやっていただけそうですか？」

「うーん、それはなんとも……」

綾乃は、笑ってごまかしている。

「たとえば、ご主人様がOKを出されたらどうですか？」

「それなら七十%くらいかなー。うーん、でもわかりません」

「それを聞いて安心しました。今日はもう引き揚げます」

「ええっ、それって、わたしがやるってことですか？」

「そうじゃありません。これは私のやり方なんです。好感触な方とひとりでも出会ったらその日は引き上げるんです」

「で、でも、わたしはやらないかも知れないですよ？」

「それでもいいんです。これが私のやり方ですから」

「そ、そうですか……」

綾乃の戸惑いが伝わってくる。

「ところで奥様、家はどちらの方ですか？」

「白歌ですが」

——おいおい、簡単に教えるなよ。

修二は、なんだか不安になった。

「駅の方ですか？」

「ええ」

「それでしたらお送りしましょうか。私も帰る方向は同じですので」

「い、いえ結構です」

綾乃は苦笑いしている。

「そのお荷物で自転車を漕ぐのも大変でしょう。車がそこにあるので、自転車ごと積んでください」

男はカメラの方を指さして言った。

「い、いえ、結構ですから」

綾乃は明らかに引きつった顔をしていた。

男が手招きをする。すると、映像の前を影が横切り、女性が車から降りた。

確か渡辺亜沙美とかいうエステの資格を持ったスタッフだ。

「どうしました？」

亜沙美が白々しく聞いた。

「今日はもうスカウトを終了するんで、奥様をご自宅までお送りしようと思っただけで、やっぱり男だと怪しまれるでしょ」

男が言うと綾乃はすかさず、

「い、いいえ、そういう事ではないですよ」

と取り繕った。

「アハハハ、江藤さん、変なこと言ったんじゃないですか？ ごめんなさいね、

奥さん」

亜沙美がペコリと頭を下げた。

「何も変なことは言われてませんよ」

綾乃の表情はすっかり和らいでいる。

「私も乗っているので大丈夫です。怪しいことはないですよ。行きましょう」

亜沙美は、綾乃の自転車のハンドルに手をかけると、先になって歩き出した。

綾乃は、少しあっけにとられているようだが、そのあとに続いて歩きだした。

亜沙美と江藤を先頭に、綾乃がカメラに向かって歩いてくる。

綾乃が立ち止った。微かに「すみません」という声が聞き取れた。

江藤と亜沙美が振り返る。綾乃が店の入り口を指さしている。

「どうぞどうぞ」

と言う江藤の声が聞こえた。

綾乃が店に向かって駆け出した。少しすると、ティッシュとトイレットペーパーを手にした綾乃が戻ってきた。

「すみません」

「いいえいいえ、どうぞこちらへ」

三人がドアのそばまで来ると、カメラが背もたれの裏に隠れた映像になった。

ガガガガ——とドアが開く。

綾乃が乗り込んできた。

「こんにちは、なんだかすみません」

綾乃の声だ。

「いいえ、いつものことなんですよ。江藤はすぐ人を送りたがる」

この声は、カメラマン岩木の声だ。

クィィィーと音が鳴ると、画面が明るくなった。

リアハッチを開けて自転車を積んでいるのだろう。

ドンッ。と聞こえて、人が乗り込む音が聞こえた。

カメラが人の背中を映し出す。

左側に綾乃。右側には亜沙美が座っている。

運転席に江藤が乗る。すると突然、綾乃の真正面の映像に切り替わった。

隠しカメラだ。

アングルは、座っている綾乃の両膝辺りの高さから顔を映し出している。

——もし綾乃がスカートを穿いていたら……。

手付金十万円の価値はある。その意味がようやく理解できた。

車の中では他愛もない会話が続いている。

「ご主人様のお仕事はどういう関係ですか？」

江藤が聞いた。

「会社員です」

「景気は良さそうですか？」

「あまり仕事の話はしないので……」

綾乃はくぐもった。

確かに修二は、綾乃に仕事の話をしたことがない。

「奥さん、肌綺麗ですね」

亜沙美がそう言うと、綾乃の右腕を取って撫でた。

「そ、そう？」

「私はエステシヤンの資格を持ってるんですけど、綺麗な方ですよ」

「子供産んだせいか、なんだか一気に肌が荒れちゃって」

綾乃にそういう感情があることに少し驚いた。

子供を産んで母親になってから、オシャレやスキンケアには関心が無くなったものと思っていた。

「充分綺麗ですよ。私なんて、エステしたってこの程度にしかならないんですから」

亜沙美は、綾乃の手を取ると、自分の左腕を摩らせた。

「凄いスベスベじゃないですか。うらやましいです」

「でも、奥様のような肌なら、もっとスベスベになるんですよ。亜沙美の肌ではこれが限界。あ、そうだ。奥さん、エステのモニターもやりませんか？」

亜沙美は、いかにも思いついたように言ったが、おそらくこれも計画のうちなのだろう。

「モニターですか？」

「今回の雑誌で、亜沙美の担当ページがあるんです。モニターだから無料ですし、どうですか？」

亜沙美に圧倒されて綾乃が困惑していると、

「こらこら、亜沙美ちゃん。奥様は今別の事で頭がいっぱいなんだから、無理強いしないの」

と、江藤が助け舟を出した。

「ええーずるいー」

「エステのモニターは、また探せばいいじゃないか」

「江藤さんがスカウトできそうだからって、ずるいー！」

亜沙美は、だたっこのようにふくれっ面になった。

「奥様はまだ考え中なんだから、そういうことも言わない」

「ぶーう！」

亜沙美の顔がますます膨れる。

「亜沙美ちゃん、昨日、エステのモニターはもう集まったって言ってなかった？」

一番後ろの座席から、岩木が言った。

「そうだけど、奥さんのような綺麗な肌の人ってなかなかいないんだよ。今のモニターさんはみんなカサカサだし、奥さんのような肌の人を磨いてみたいんだもん」

亜沙美は足をバタバタさせている。彼女もジーンズ姿であるのが残念だ。

「まあその件はまたあとだ。奥様、そろそろ駅近くですが、家はどの辺ですか？」

江藤に聞かれるがまま、綾乃は「右」「左」と案内した。

「ここです」

車が止まった。綾乃が降りて、亜沙美も降りた。

リアハッチが開いて、江藤が自転車を降ろした。

映像が、岩木カメラに変わる。綾乃は江藤と亜沙美に礼を言っている。

綾乃が玄関に入った。

江藤と亜沙美はそれを見送ると、車に乗り込んだ。

「なかなかの好感触だな」

岩木が言った。

「モデルとしてはいけそうですね」

江藤が続けた。

「エステもいけるかもよ」

亜沙美はそう言うと、カメラに向かって指でOKマークを作り、ニコリと笑った。

映像が終わった。

修二は、この映像をダウンロードして、パソコンに保存した。

自分が了解を出せば、きっと綾乃はモデルの仕事を引き受けるだろう。

もしかしたら、エステのモニターをも了承するかもしれない。

もちろんそこには、盗撮カメラがあるのだろう。

想像するだけで鼓動が高鳴る。これ以上無いくらいに勃起している。

修二は、Tシャツにジーンズ姿の綾乃の膝元からを映した映像で一時停止して、思い切り射精した。

修二はメールを書いた。

篠塚様

さっそく映像を拝見しました。とても興奮しました。

妻からモデルの事で相談を受けましたが、「好きにすればいいよ」と返事をしておきました。

妻は考えてみるそうです。

今後の展開に期待しています。

では。

翌日、修二は早くも仕事が手につかなくなっていた。

綾乃の性格からして、仮に読者モデルの返事をするとしても、言われた通りに、二、三日後にするはずだ。

それをわかっていても、このワクワク感は抑えられなかった。

帰宅後、食卓で綾乃が修二の目をじっと見て言った。

「ねえ、読者モデルの話だけど、本当に受けてもいいの？」

「綾乃はどうしたいの？」

修二の心臓が高鳴った。綾乃に聞こえやしないかとやきもきした。

「やってみてもいいかなって思ってるよ」

「それならやってみたらいいんじゃない？」

「本当にいいの？」

「どうして？」

「結婚する前はあんなに反対してたから」

「あの時は、綾乃が有名になって、俺から離れていくんじゃないかって不安だったんだよ。だけど今はもう結婚しているわけだし、もしも綾乃が有名になっても、俺から離れてはいかないだろう？」

「離れるって、離婚するってこと？ わたしが有名になったら？」

「そうそう。どこかのイケメンの芸能人と仲良くなってさ」

「あははは。まさか、そんなわけないじゃない」

「だろう？ だからもう、反対する理由もないんだよ」

「そっか。じゃあ、わたしやってみようかな」

綾乃のその返事を聞いただけで、修二の股間は固くなった。

「いつ返事をするんだ？」

「明日かな」

「もう他の人に決まったりしてね」

「まさか。でも、返事は早い方がいいのかな。じゃあ、これから電話してみようかな」

綾乃が時計を見上げた。午後八時を少し回っている。

「こんな時間に大丈夫なの？」

修二は、大丈夫だろうと思っているが聞いた。

「名刺の裏に、『電話は夜十一時までは大丈夫です』って書いてあるの」

「本当に？ うわ、本当だ。ずいぶん細かい人だね」

「スカウトの仕事って大変みたいよ」

綾乃は、微塵も疑ってはいないようだ。

食事が終わって後片付けを済ませると、綾乃は携帯電話を取り出して、名刺を見ながらボタンを押した。

修二は何も気にしない素振りで、ソファーに横になってテレビを見つめた。

『もしもし、先日サンセットマートの前で読者モデルのお話をいただきました宇海と申しますが……。はい、帰りに家まで送っていただいた者です。……。はい。……。はい、主人と相談しまして、読者モデルをお引き受けしたいと思ひまして。……。はい。……。はい、よろしく申し上げます。……。はい。……。はい。住所は白歌一の二の五です。……。はい。お待ちしております』

電話を切ると綾乃は、

「読者モデルをお願いしますだって。後日、詳細を送ってくれるみたい」

と言って、自室に向かった。

寝ている愛里を起こさないためか、豆電球を点けてタンスを漁っている。

おそらく、早くもモデルとして着る服を物色しているのだろう。

修二はもう我慢ができなかった。

「もう寝るよ、おやすみ」

と言って自室に戻るやいなや、大量に発射して寝た。

翌日の火曜日は何事もなく過ぎ去った。

水曜日。仕事から帰ると食卓の上に一通の封筒が置いてあった。

『ビューティフルワイフ編集社』と書いてある。

「これ、見てもいい？」

キッチンにいる綾乃向かって聞いた。

「うん、いいよ」

綾乃は美容室に行ったのか、少し髪型が変わっていた。

封筒の中から書類を取り出して広げた。

このたびは読者モデルをお引き受けいただき、誠にありがとうございます。
早速ですが、下記に詳細をお伝えいたしますので、よろしくお願い致します。

- ①撮影日：八月二十日（金）（日程が無理な場合はご相談ください）
- ②時刻：午後一時三十分～午後六時までを予定（相談可能）
- ③場所：当スタジオ（ご自宅までお迎えに上がります）
- ④謝礼金：二～三万円（撮影枚数による）
- ⑤ご用意頂く物：普段着、オシャレ着（数着お持ち頂いても構いません）

※撮影スタジオ住所

〒000-0000

水歌市1-2-25

プロジェクトコンサルティング（株）

TEL.000-0000-0000 篠塚まで

「新しい服を買ってあげようか？」

修二は、書類を封筒に戻しながら聞いた。

「うん、去年買ったドレスがあるから、それを持っていくわ」

「あれでいいの？」

「うん、あのドレスで充分よ」

「わざわざ家まで迎えに来てくれるんだな」

「そうみたい。夕方に電話が来て、一時頃に迎えに来るって」

「それじゃあ、エステにでも行くか？」

修二は言うてからハッとした。綾乃はこれまでエステという単語を口にしたことはない。不自然なことを言ってしまったと思った。

「エステかぁ」

綾乃は特に疑問に思わなかったらしく、ホッとした。

「写真に撮られるなら、少しでも綺麗な方がいいんじゃない？ 今のままでも充分すぎるほど綺麗だけど、女性はそういうのを気にするだろう？」

「だけど、このままでいいわ。普段の姿を撮りたいって事だろうし、一人だけお肌ツヤツヤっていうのもおかしいでしょ？」

綾乃は自分に言い聞かせるように言った。もしかすると、エステには興味があるのかも知れない。

「明後日か。俺は仕事でいないけど、まあ頑張っておいで」

「うん。なんだか恥ずかしい気もするけど、やるだけのことはやってみるわ」

綾乃がテーブルの上にある雑誌を手を取った。

よく見るとそれは、ファッション誌だった。

子供を産んでから、綾乃はファッション誌をまるで買わなくなったが、モデルの仕事を引き受けると決めて、買ってきたのだろう。

ポーズの研究でもしているのだろうか。雑誌を真剣に見つめている。

篠塚和夫は、明日の撮影用に仕入れた衣装を整理していた。

五着のドレスは、ファッション業界の知人のコネを使って手に入れた、まだ店頭にも並んでいないニューモデルで、もともとタイトなミニスカートなのだが、そこからもう少しだけ丈を短く補正してもらった。

下着も三着ほど用意していて、レース生地でヘアが透けるデザインと、透けないように裏地を張り付けたものを選んだ。

もちろん、奥様が明日の撮影で、この下着を身に着けてくれるとは思っていない。

これを見せて断らせたところで、ビキニの水着をお願いする。

一度ハードルを高く上げて、そこから落とす。

最初からビキニの水着を見せれば、拒否される可能性は高いが、セクシーな下着を見せることによって、ビキニ水着への抵抗感を減らす作戦だ。

これがダメなら次は、青い競泳用の水着である。

それも、太ももの半分までを覆うセパレートタイプの水着で、ヘアの処理など全く必要としないものだ。

これなら引き受けてもらえる可能性も高く、しかも、この水着こそが危険なのである。

超一流のスポーツメーカーから発売されたこの水着は、水への抵抗を最小限に抑えるため、極めて薄い素材で作られた。

乳首の突起や、ヘアが透けないために、局所には特殊加工がほどこされる予定であったのだが、工場のミスによってその作業工程が飛ばされ、加工のない製品が一部流通した。

客からの苦情によってすぐに回収され、一瞬だけネットニュースにもなったが、すぐに終息した。

この水着は、その事件を知った時に、メーカーへのコネを使って特別に譲ってもらったのだ。

大切に保管していたこの水着を、いよいよ開封できる。

だが、惜しむらくは、水で濡らさなければ透けないという事だ。

念のため、ビニールプールと簡易シャワーを用意しているが、最初の撮影で水に濡れることは、ハードルが高いような気がする。

最後に用意したのが、ピンク色のジャージタイプのスポーツウエアと、黄緑色のスパッツだ。明日の撮影の本命である。

これは、水着を譲ってもらった時にオマケで頂いたもので、発売前にお蔵入りとなった商品である。

吸水性と通気性に特化した商品なのだが、テストの段階で大変な事が発覚した。

汗を吸収すると下着が透け、さらには縫製の関係で、歩いているだけで女性特有のクレバスにひどく食い込むのだそうだ。

電話でのインタビューで、奥様はクラシックバレエと創作ダンスをやっていたと話していた。

きっと、スパッツは履き慣れていることだろう。

いきなり頼んでも身に着けてもらえそうだが、それでも確率的には五十パーセントを下回るかもしれない。

しかし、下着や水着の要望でハードルが上がりまくったところで、学生時代にはよく身に着けていたスパッツをお願いされれば、断った罪悪感も手伝って、かなり高い確率で引き受けてもらえるような気がする。

了承した奥様は、自前の下着の上にスパッツを履いて現れ、そこで岩木か壺沙美にダメ出しをされるのだ。

「モデルなので下着の線が出るのはNGです」

この先はわからない。

黙ってそれに従うか、それとも下着を脱いで直穿きすることを拒絶して断るか。

どちらにせよ、このシーンは依頼者にとっても、たまらないものとなるだろう。

総額三十万円。ほとんどがドレスの費用だが、今回仕入れた衣装の総額である。

過去にも、妻をモデルにセクシーな写真を撮ってほしいという依頼はあったが、その時は貸衣装からのレンタルですませた。

手付金の十万円を大きく上回る投資をしたのは、何よりもそれだけ今回の依頼には力が入っているからだ。

これまでの依頼者とは比較するのも気が引けるほどの美人で、しかも若く、それでいて性には全くの無関心だという。

例えるなら、難攻不落の白鷺城といったところだろう。
ひとつ間違えれば、その城は固く門を閉ざし、二度と開くことは無い。
その難しさが、篠塚にとってはたまらなかった。
失敗すれば大赤字。だが、成功すれば、場合によっては大金を生む可能性だつてある。

性的興奮はもちろんのこと、攻略する楽しさと、ギャンブル性もある。
これ以上の依頼は、かつてもなかったし、今後二度とないかもしれない。
篠塚は、カメラマン役の岩木とアシスタントの亜沙美を呼びつけて、何度も何度も説明を繰り返した。

金曜日の朝がきた。
綾乃がソワソワしている。
「ああ、もう緊張するう」
朝食は、修二の分しか出ていない。
「綾乃は食べないの？」
と聞くと、
「喉を通らないよ。それにさ、少しでもスマートに見せたいじゃない」
そう言うと、綾乃はグラスに豆乳を少しだけ注いで飲んだ。
「普段の綾乃でいればいいんだよ。緊張していたら引きつった顔で写っちゃうよ」
そう言う修二の心臓もバクバクだった。
「もう、余計に緊張しちゃうじゃない」
綾乃は意味もなく、あちこち歩き回っている。
「母さんは何時頃来るって言ってた？」
「一時までには来るって言ってたけど」
愛里を連れて行けないときは、修二の母親が愛里の面倒をみってくれる。
修二は母親に電話した。
『母さん、俺。今日頼むね』
『はいよ。十時までには行くって綾乃さんに伝えておいて』
『うん、わかった』
「母さん、十時までに来るってさ」
と言ったが、綾乃の耳にはほとんど届いていないようだ。
「じゃあ、会社に行ってくるね」
「はい、行ってらっしゃい」

いつもは玄関まで送ってくれる綾乃が来ない。それだけ緊張しているのだろう。

会社に着いた修二も、ずっとソワソワしていた。

今日、確実に撮影が行われる。

いったいどのレベルまで撮影されるのかはわからないが、夜にはその映像がメールで送られてくることだろう。

綾乃がどういう対応をして、どこまでやってくれるのか。

考えているだけで股間が熱くなる。

全く仕事も手につかず、どうにか落ち着かせようと深呼吸をしていると、突然、仕事が舞い込んできた。

相手先は、超大手企業のN物産で、年に一度だけこの時期に取引先を公募するのだが、選ばれるのはたったの一社だけで、しかも、実は最初から選ばれる会社は決まっている。

修二の勤務する小さな会社など、相手にされるはずもなく、しかし、顔だけは出しておけば、いつかはおこぼれが貰えるかもしれないと、交渉だけはすることになっているのだ。

その役目は、社長がくじ引きで決めるのだが、今年は修二がハズレくじを引いてしまった。

「先輩、がんばってくださいね」

後輩が白々しく言う。

「はいはい」

修二は、軽く受け流してN物産へと向かった。

客室へ通されると、同年代の男性と共に中年の男性が現れた。

挨拶をかわし、名刺交換をすると、【部長】の文字があった。

——なぜ部長が？ いつもは平社員なのに。

修二は出かけた「なぜ」という言葉を飲み込み、自社のアピールをした。

すると部長が、

「なるほど、いいね。それじゃあ今年は、お宅さんに頼もうかな」

と、契約書をテーブルの上に置いた。

——えっ？

っという言葉は飲み込んで、

「あ、ありがとうございます」

と、使う予定の無かった社印を取り出して、契約書に押印した。

「ではよろしく頼むよ」

部長が手を差し伸べた。修二は両手で部長の手を握った。

「よろしくお願い致します」

「ああ、期待しているよ」

——今日はなんてラッキーな日なんだろう。

会社に戻って係長に報告をすると、

「えっ？ まじで？」

とキョトンとしていた。

「本当です。これを見てください」

契約書を取り出すと、

「宇海、お前、でかしたな！！」

と大声で叫んだ。

周りから視線が集まる。

「課長、課長！ 宇海が大物契約を取ってきました」

係長は修二の手を引いて、課長の机まで駆け寄った。

「本当か？！ ありえない。いや失礼。よくやったな！！」

課長は修二の肩をポンッと叩くと、契約書とともに部長室へ消えた。

するとすぐに部長が顔を出して、修二に向かってガッツポーズを見せると、社長室へ向かった。

周りがざわついている。

社長室から部長が出てきた。修二を手招きで呼んでいる。

社長室に入ると、社長は満面の笑みで修二に手を差し伸べた。

修二は社長の手に両手を重ねた。社長も両手で修二の手を握った。

「宇海君！ 私は君が入社してきたときから、いつかでかいことをやってくれる男だと思っていたよ。君は実に有能で素晴らしい！！」

社長は、齒の浮くようなセリフをどんどん並べた。

「い、いえ。これは運が良かっただけです」

「いいねえ、その謙遜！ 運も実力の内だ。今後の活躍にも期待しているよ」

社長は、いつまでも修二の手を離そうとはしない。

「はい、精いっぱい頑張ります」

修二が頭を下げると、ようやく社長は手を離れた。

「君には社長賞を出すから、楽しみにしていてくれ」

「はい、ありがとうございます」

社長室を後にした修二に、部長が囁いた。

「社長賞って何か知っているのか？」

「いえ、そんな賞があることも初耳です」

「社長賞は百万円だぞ。それもポケットマネーだ」

「ほ、本当ですか？」

「ああ、本当だ。私もかつて貰ったことがある。この調子でいけば、君も部長コ

ースだな」

部長は、修二の肩をポンポンと二度叩くと、ハハハと笑った。

降って湧いたような百万円。

これなら成功報酬なんてちっとも痛くない。

携帯が鳴った。篠塚からだ。

『これから奥様をお迎えに上がります。今夜にもその様子をお送りしますので、申し訳ありませんが手付金のお支払はよろしいですか？』

『ええ、もちろんです』

『では振込先を言いますね』

篠塚が突然言うので、修二は手のひらに口座を書きとめ、電話を切ってすぐに、ネットバンキングを利用してお金を振り込んだ。

時計は十二時三十分を少し回っている。

会社を出てコンビニで弁当を買い、外に出たタイミングで携帯が鳴った。

『振込を確認しました。ありがとうございます』

『はい、よろしく願います』

興奮のあまり、心臓がバクバクして口が渴き、買った弁当の大半を残してしまっ

午後七時三十分。いつもの時間に家に着いた。

玄関には綾乃の靴がある。予定通りに帰ってきたのだろうか。

綾乃の顔を見るまでドキドキする。食卓の上にビニール袋が上がっていた。

「ただいま」

興奮しているのか、少し声が上ずってしまった。

「おかえりさない」

綾乃は、何事もなかったかのように平然としている。

「今日はどうだった？」

「うん、楽しかったよ」

綾乃はそう言いながら、食卓の上のビニール袋から弁当を取り出して、電子レンジへ入れた。

「今日は弁当か」

「うん。帰りが少し遅くなって、夕飯の支度が間に合いそうになかったら、お弁当にしちゃったの。ごめんね」

「たまにはこういうのもいいさ」

修二はネクタイをほどき、部屋着に着替えた。

「帰りも送ってくれて、弁当屋さんにも寄ってくれたのよ」

「へえ、親切だね」

「うん、それにね。謝礼は二、三万だって言ってたのに、結局五万円も貰っちゃって、このお弁当まで買ってくれたんだ」

五万円という金額を聞いて、修二の胸が苦しく締め付けられた。

綾乃はいったいどこまでやったのだ。

すでに勃起している。それを隠すために席に着いた。

レンジはまだ回っている。綾乃はそれをじっと覗き込んでいる。

チンッと音が鳴った。

綾乃は丁寧にお盆に乗せてから弁当を運んできた。

「いただきます」

二人声をそろえて食事を始めた。

修二は敢えて、モデルのこと聞き出すのをやめようと思った。

今ここで色々聞いてしまうと、メールで送られてくる映像の興奮が小さくなってしまうからだ。

この後いったいどうなってしまうのか、というドキドキ感を失いたくはない。

「スタジオに着いたらさ、四十歳くらいのおばさんがいたの」

綾乃が思い出したように口を開いた。

「スタッフの人？」

「ううん、わたしと同じ読者モデルの人よ。わたしね。本当に自分がモデルでもいいのかなって少し思ってたんだけど、その人を見て安心しちゃった。って、失礼かな」

「綺麗な人だったの？」

「普通のおばさんだった。でも、比較的スマートだったかな」

「そんな人を撮るくらいなら、綾乃のスペースを増やせばいいのに」

「違うの。この雑誌は各世代の人をモデルにするのよ。六十歳の人もいるんだから」

「そうなの？ それじゃあ若くて綺麗な綾乃は、この雑誌のトップモデルだね」

「ええ、そんなことはないよ」

綾乃のテンションが少し高い。

憧れだったモデルを体験して、興奮しているのかもしれない。

「いい思い出ができたね」

「うん。それでね、わたしをモデルにしたページが少し増えそうなの。仕事の話も出て、また近いうちに撮影することになるかもしれないんだ」

「すごいね。専属モデルになっちゃうんじゃない？」

興奮している綾乃を見て、修二は少し持ち上げてみた。

「はは、なっちゃったりして！」

綾乃は、すっかりその気になっている。

いったいどんな撮影が行われたのだろう。

修二は、自室まで駆け上がりたいたい衝動をぐっところえて、あえて綾乃と食事の歩調を合わせた。

綾乃は、いつになく話しながら食べるものだから食事が遅い。

最後の一口を食べるまでじっと待ち、それを見てから風呂場に向かった。

シャワーでさっと汗を流して風呂場を出ると、綾乃は寝室の鏡の前でモデルのようなポーズをとっていた。

「すっかりはまってるね」

「だって、どうせやるならかっこよく決めたいじゃない」

おそらく今日習ってきたポーズだろう。

姿見の前で何度もポーズを取り直しているのは、クラシックバレエ時代の癖なのかもしれない。

「愛里が起きちゃうよ」

と言うと、少し驚いた表情を見せて、そっと姿見を持ってリビングまでやってきた。

「ほどほどにね」

「うん」

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

綾乃は姿見から目を離さない。

クラシックバレエをやっていたおかげか背筋はピンと伸び、すでに充分決まっていると思うのだが、修二は口をはさむのをやめて、自室に向かった。

カメラマンの岩木は、篠塚の同僚で同じくリストラ組だった。

童貞を捨てた直後から始まった女遊びは、あっという間に百人斬りを達成し、それに比例するように、岩木は女を口説き落とすテクニックも身に着けていた。

岩木と寝た女は、必ず決まって再び岩木を求めた。

骨太の岩木は男根も骨太で、経験が豊富すぎるのか遅漏であった。

それに加えて絶倫で、射精後すぐに勃起した。

岩木の激しすぎるセックスにより、すべての女性が失神した。

超一流大学に入学した岩木は、映画研究部に入った。

そこでカメラマンを志願し、撮影のテクニックを学び、さらには照明や音声までをも手伝って、わずか数ヶ月でそのすべてをマスターした。

部員は岩木を真面目で熱心な奴だと評価していたが、岩木にとってのそれは、ハメ撮りビデオを撮影するテクニックを身につけるためだけにやったことであつた。

これまで培ってきた技で女を口説き、上手く言いくるめではハメ撮りビデオを撮る。

できあがった作品は、照明、音声、カメラアングルの全てが完璧で、プロの業者も顔負けの秀作であつた。

その作品をネットで販売するのだが、岩木は丁寧にも女性の顔に薄くモザイク処理を入れていた。

顔がわかれば被害届を出される可能性があり、そうなれば岩木のキャリアに傷がつく。

顔にモザイク処理をすることで売り上げが落ちることは予想していたが、それに反してDVDは売れに売れた。

モザイクがあることでリアリティーが増し、なによりも岩木の絶倫さと、必ず女性が失神するという光景に、たくさんの固定客ができた。

女子高生、女子大学生、さらには若妻まで、優に三百人は撮影した。

大学二年の夏。岩木はセックスに飽きていた。

岩木は夏休みを利用して、自転車で旅をした。

デジタルビデオカメラを片手に、田舎の風景を撮るという名目で農村を訪れて、そこで四十代以上の女性をターゲットに口説きまくつた。

農作業をしている四十代の女性を口説いては、納屋でハメ撮り、それは相手も五十代であつてもお構いなしだつた。

泊まる宿を探しているとき、六十代の女性が泊めてくれるというので、そのご好意に甘えて上り込み、一人暮らしだと聴いて、うまく口車に乗せてハメ撮りしたこともある。

岩木に、そういう趣味があつたわけではない。

ただ、高齢の女性と関係を持つことで、自分の身体が汚れてゆくという錯覚を抱いていた。

街に戻ってから、再び若い女性を抱いたとき、汚れた肉棒でピチピチの女性の子宮を搔きまわすというその行為に、猛烈に興奮を覚えた。

その日から岩木は、おばさんと同年代の女性とを一日おきにナンパするようになり、やがては、大学からの帰り道、最初に出会った女性をナンパするという遊びを始めた。

二周り以上も年上の女性の上で腰を振りながら、吐き気を覚えつつも次回の興奮への期待感で止めるに止められず、結局それは社会人になるまで続いた。

大学でも上位の成績だつた岩木は、超一流企業に内定が決まつた。

それと同時に、ハメ撮りDVDの販売をやめた。
そろそろ警察が動き出すかもしれない。そんな予感もあったからだ。
勉強はできた岩木だったが、会社での成績は低かった。
女を口説き落とすテクニックはあっても、ビジネストークは苦手だった。
そんな折、大規模リストラの話が出た。
掲示板にリストラ対象者の名前が貼り出され、左上の先頭に篠塚和夫の名前を見たとき、自分もリストラされると確信した。
篠塚は、社内では中間クラスの成績で、自分よりも遥かに上の存在だった。
そんな篠塚でさえリストラされるのに、自分が残れるはずもない。
名前を読み進めていくと、どうやらそれは成績順のようであった。
篠塚を筆頭に、それより成績の低い者が切られてゆく。
岩木の名前は、女子社員のすぐ上にあった。
——なんだ、最下位かよ。
岩木は思わず笑った。
リストラをされはしたが、岩木は特に落ち込んではいなかった。
退職金が出るし、なによりハメ撮りDVDで稼いだ貯金が相当あったからだ。
あまり派手に活動はできないが、これからもちょくちょく新作を出せば食うには困らない。警察に捕まったら、その時はその時だ。
社員食堂でそんなことを考えていると、目の前に篠塚が座った。
「お前もリストラか」
篠塚が言った。
「俺の成績じゃ当然だろう。それよりもお前がリストラとは驚いたな」
「まあ、これも運命だとあきらめるさ」
篠塚は、思いのほか明るい表情をしている。
岩木がうどんをすすると、篠塚が切り出した。
「岩木、お前はこれからどうするんだ？」
「まだ考えていない。仕事が終わってからじっくりと考えるさ」
岩木は適当に返事をした。
「実はさ。前から計画があるんだけど……」
篠塚が小声で、自分で立ち上げる会社と、その内容について話した。
「寝取り系か」
「ああ、それにはカメラマンが必要だ。岩木、おまえがやってくれないか？」
篠塚と岩木は、同じ大学を卒業している。
篠塚は特にサークルには所属していなかったが、顔が広くて友達も多く、岩木が映画研究部でカメラマンを担当していることは知っていた。
「やってみてもいいぞ」

岩木は即答した。この新しい仕事が失敗したところで、自分には他に食べていく方法がある。それに、寝取り系という未開のジャンルにも興味があった。

「おお、そうか。それはありがたい。詳しくは後で話すからな」

篠塚は、岩木のゴツイ肩をバシッと強く叩いた。

宣言通り、篠塚は会社を立ち上げ、自宅を改造した。

初めてその会社に顔を出したとき、岩木は自分の過去を篠塚に話した。

「女が必ず失神するやつだろ？ 知っていたさ」

篠塚の返事に、岩木は絶句した。

「誰から聞いた？ 楠谷か？」

楠谷は岩木の大学時代の後輩で、同じ映画研究部でカメラアシスタントをしていた。

楠谷は口が堅く、岩木も信頼していたため、ちよくちよく裏DVDの撮影にも参加させていた。男優として登場したこともある。

「へえー、楠谷も噛んでいたのか」

「違うのか。じゃあなんでお前が知っているんだ？」

「俺もあのDVDのファンなんだよ。お前、声までは加工していないだろう。声とか口調とかで、あれはお前なんじゃないかと思っててさ。そうしたら、Vol.238で確信した。あれは岩木、お前だってね」

「Vol.238？」

岩木は数字を言われたところで、それがどういう内容なのかまでは覚えていない。

「238の時、お前のケツには大きなデキモノができていただろ。みんなでスパランドに行った時と、DVDのタイムカウンターが一日違いだったからな」

確かにDVDを撮影する前日、大学の仲間数人とスパランドに行った。

篠塚に、

「そのケツのできものは酷いな。微熱がでないか？」

と言われたことを思い出した。

「お前はよく見ているな」

岩木が言うと、篠塚は、

「あはは、俺ってそういう細かいところが気になっちゃうんだよ」

と笑った。

篠塚は、あのDVDの作者が岩木だと気づいても、十年以上なにも言ってこなかった。あのDVDを利用して、岩木にどうこう言うつもりが無いことは、容易に推察できた。

「俺からお前にカメラマンを頼んでおいてなんだが、これから作る作品は、あくまでも一個人に対するハメ撮りDVDだ。勝手に横流しなんてしたら、その時は

岩木と言えども、こちらもやらなきゃならないことが出てくる。信じているから頼むぞ」

「ああ。その時は、あのハメ撮りDVDの作者が俺だと警察にチクってもいいぞ」
篠塚に付いて行けば、当分金の心配はいらないだろう。

それにもし、金が湧いてこなければ、いつでも自分でDVDを作ることができる。

何よりも、寝取り系という未開の領域を経験できるだけで、充分満足だった。
WEBサイトを立ち上げ、しばらくすると客が来た。

<五十歳の妻を寝取ってほしい>

初めての事で緊張したが、あっさりと終わってしまった。

声をかけて少しエロトークをして、冗談半分にホテルに誘ってみたらあっさり
と付いてきた。

実につまらない内容だった。

それから数十件は依頼が来たが、どれもこれも熟女ばかりで、いとも簡単に落ちた。

——なんだ、結局はこんなものか。

岩木は少し落胆していた。

そんな折に飛び込んできた依頼。

<二十六歳 綾乃>

年齢もそうだが、貞操観念がとても強い。

いや、貞操観念がどうかという以前に、性に対する考え方がこれまでの女性とはまるで違う。

——セックスは子供を作るためだけの行為だなんて、もったいなさすぎるぜ、奥さん。

綾乃の写真を片手に、岩木はこれからやってくる綾乃のためにスタジオのセッティングをした。

こんなにも美しい女性なら、プロのファッションモデルにだってなれただろう。

「ああ、もったいない、もったいない」

岩木は、昨晚篠塚に言われたことを、頭の中でもう一度だけシミュレーションした。

自室に入った修二は、すぐさまパソコンの電源を入れた。

メールを立ち上げようとする、ソフトの更新画面が出てきた。

「なんだよ、よりによって」

キャンセルしようと思ったが、気を散らせたくないので更新を始めた。
右へ伸びてゆく青いバーが、いつになく遅く感じる。
終わるや否や、すぐにメールソフトを立ち上げた。
待ちに待ったメールが来ている。

宇海修二 様
篠塚でございます。

早速ですが、本日の動画をアップしましたのでお知らせ致します。
多くは語りません。
前回同様、下記 URL にアクセスし、ご覧ください。
パスワードは ayanolove です。
http~~~~~

それではお楽しみください。

心臓が一瞬で激しく高鳴った。
手が汗ばんでいる。少し震える手でアドレスをクリックしたものだから、一度目は失敗した。
二度目によりやく画面が切り替わり、パスワードを入力すると、二つのファイルが並んでいた。
まずは左端にある 001 番から再生した。

映像は車の中からスタートした。
運転席にスカウトマンの江藤。助手席には篠塚が座っている。
後部座席には渡辺亜沙美。その後ろから、誰かが撮影しているようだ。
「えー、これから奥様をお迎えに上がります。間もなく到着です」
篠塚が前を向いたまま解説した。

見慣れた風景になった。車が止まった。自宅前だ。
篠塚が助手席から降りると、家の玄関のチャイムを押した。
しばらくすると扉が開いて、綾乃が顔をのぞかせた。
何やら会話をしている。綾乃が家の中に消えて扉が閉まった。すぐにまた開いて綾乃が出てきた。

綾乃は黄色いTシャツに、紺色のジーンズ姿。まさに普段着だ。
二人が車に向かって歩いてくる。亜沙美が車から降りて、綾乃を誘導した。
篠塚が助手席に乗り込んだ。ほとんど同時に綾乃が乗り込んで、運転席の後ろに座った。その隣に亜沙美が座る。

映像が切り替わった。綾乃の膝の高さからの視点で、顔までが入った映像だ。これは前回も見た隠しカメラだろう。

綾乃がもしオシャレ着を選んでいたら、あるいはパンチラが見られたかもしれない。

「奥様、本日はありがとうございます」

篠塚の声だ。

「いいえ、こちらこそよろしく申し上げます」

心ばかりか、綾乃の声が上ずっているように感じる。

「緊張していますか？」

「はい。少しだけ」

綾乃は笑顔を作っているが、少し引きつっているようだ。

「いきなりで申し訳ないのですが、実はメイキング映像も撮っているんですよ」

「そうなんですか？」

「はい。もしよろしければ、このままカメラを回してもよろしいですか？」

「カメラですか？」

綾乃が振り向いた。そこで初めてカメラの存在に気付いたようだ。

「今回メイキングカメラを担当しております、楠谷です」

篠塚が紹介すると、カメラが少し下を向いて戻った。楠谷がカメラごと会釈したのだろう。

綾乃が軽く会釈した。

「ちなみに、メイキング映像は雑誌の付録のDVDで使う予定です。ご協力いただけますか？」

「ええ、まあ、構いませんけど……」

綾乃は、少し困惑しているようだった。

車の中では篠塚が、夫との馴れ初めなどを聞いていた。

綾乃はそれに素直に答えていた。

アダルトDVDなら、こういう話の流れで、

「旦那さんとは週にどのくらい？」

などという話題になるが、篠塚はそういった下ネタは一切振らなかった。
やがて車が止まった。

「到着です。ここがスタジオになります」

綾乃が車から降りたところで映像は途切れ、すぐに次の映像に変わった。

歩く綾乃の後ろを追う映像で、たびたび綾乃のジーンズのお尻がアップで映し出された。

篠塚はドアを開けると、先に綾乃を通した。すぐ後に亜沙美が続いてスリッパを出し、ドアをカメラ越しに伸びた手が抑えると、篠塚も玄関に入った。

サンダルを履いた篠塚は、先頭に立って撮影スタジオがある地下室へと降りて行き、綾乃と亜沙美が続いた。

篠塚が口にシーツと手を当て、静かに扉を開いて中へ入ると、フラッシュの光が飛び込んできた。

パシャットという音と、ピリリリという音が聞こえる。これは確かカメラの音だ。

スタジオの奥には、小柄な女性がドレスを着てポーズをとっている姿が見える。綾乃が言っていた四十代の女性だろう。

「まだ時間が掛かりそうなので、そちらで見学でもしててください」

篠塚が小声で言うと、綾乃はスタジオの隅にある小さな椅子に腰をかけ、丸テーブルの上にバッグを乗せた。

映像はすぐに移動して、綾乃の背中越しからを映した。

綾乃は、女性をじっと見ている。

「お飲物です」

という声が出て、細い腕とオレンジジュースがフレームインした。

渡辺亜沙美だろう。

綾乃がオレンジジュースをストローから飲むが、視線は女性から外さない。

「じゃあ、次のポーズをお願いしまーす」

野太い男の声だ。岩木だろう。

「はい」

と言うと、女性はドレスの裾を両手でつまんで横に開いた。

「奥さん、綺麗な足だね。本当に四十代？」

フラッシュが光る。

「そうですよ」

「二十代後半って言っても、通用するんじゃないの？」

「それはほめ過ぎですよ」

女性がそう言った瞬間、スカートがさらに持ち上げられたような気がした。

フラッシュが二度三度光ると、岩木はカメラを下ろし、

「はい、これでおわりで一す。お疲れ様でした」

と、女性に軽く会釈をした。

女性は、

「ありがとうございました」

と、丁寧に頭を下げてから、奥の部屋へと消えて行った。

岩木がタオルで顔の汗を拭いながら、綾乃に向かって歩いてきた。

「ああ疲れた。少し休ませてね。でも予定時間には開始するから」

岩木は、持っていたスポーツドリンクを、ぐいっと飲んだ。

「わたしは、全然大丈夫です」

「奥さん、モデルは初めて？」

「はい。実は、三、四年前にスカウトされたことはあるんですが、その時はお断りさせていただきました」

「そうなんだ。まあ、俺がスカウトマンでも間違いなく奥さんはスカウトするな。こんな美人さんには、そうそう出会えないもん」

「そんなことはないです」

「あるさ。俺もカメラマン歴は長いけど、プロのモデルだって圧化粧でずいぶんごまかしてるし、中には整形までしてるのもいるんだよ。自然でこんなに美しい人なんて、業界でもレアだよ」

「そうなんですか？」

「現実はそのものさ。おっと、でもこれはオフレコでね」

岩木は口に人差し指を当てるポーズをすると、にやっと笑った。

「ふふふ」

と綾乃は愛想笑いをした。

「汗で気持ちが悪から着替えてくるわ。亜沙美、少しの間よろしく」

「はい」

岩木がフレームアウトして、ボタンと扉の閉まる音がした。

綾乃がジュースを飲みほして、グラスをテーブルに置いた。

その直後に奥の扉が開いて、先ほどモデルをしていた女性が、ワンピース姿でこちらに歩いてきた。

「能登さん、お疲れ様でした。上に社長がいますから、謝礼を貰ってくださいね」

「はい、ありがとう」

女性がカメラの前を通り過ぎる時、ピースサインをしてウインクした。

当然、彼女も仕掛け人のはずである。

岩木が戻ってきた。先ほどとは色違いの白いポロシャツを着ている。

「じゃあ奥さん、始めましょうか」

「はい。あっ、すみません。お手洗いを借りてもいいですか？」

「ああ、どうぞどうぞ。亜沙美」

「はい。奥さん、こちらです」

綾乃の背中をカメラが追う。扉から二人出て行ったが、カメラはそこから動かなかった。

次の瞬間には、綾乃のトイレ盗撮の映像に変わるかもしれない。

そんな想像をした瞬間、心臓が強い音を立てた。何とも表現できない興奮が全身を覆っている。

しかし、そんな期待とは裏腹に、タイムカウンターだけが無駄に進み、五分もすると二人は戻ってきた。

「お待たせしてすみません」

綾乃が岩木に言った。

「気にしない気にしない。緊張すれば誰だって行きたくなりますよ」

岩木はカメラをいじりながら言った。

「奥さん、椅子に座って少しだけ待っててくださいね」

亜沙美が小走りで奥の部屋に入って行った。少しすると出てきて、

「着替えはこちらになるんで、荷物はこちらに置いてください」

と、ドアの前から言った。

綾乃が席を立った。

緊張しているのか少しおぼつかない足つきで、奥の部屋に消えた。

一本目の映像はここで終わった。

すぐに 002 番を再生した。

映像はカメラマンの背中越しから、モデルが立つステージを映している。

映像が動いた。奥の部屋のドアを映すと同時に、綾乃が出てきた。

服装は黄色いTシャツにジーンズ姿と変わらない。

綾乃はいそいそとステージに立った。岩木がカメラを身構えた。

パシャッ、ピリリリと音が鳴る。

綾乃は棒立ちのまままだ。

「奥さん、笑顔、笑顔」

岩木が言うが綾乃の笑顔は少し引きつっていた。

「亜沙美ちゃん」

「はい」

岩木に呼ばれて亜沙美が岩木の横に立った。

「奥さん、亜沙美と同じポーズを取ってみて」

岩木の横で亜沙美が、腰に手を当て頭を傾け、かかとを立ててみせた。

綾乃は、それを真似るようにポーズをとるが、何かが違う。

「いいよー。だんだんほどけてきた」

岩木が褒めた。

亜沙美がさらにポーズを変える。ファッション誌ではよく見るようなポーズだ。

綾乃が真似をする。真似をするたびに岩木は褒めた。

だんだんと綾乃の表情が和らいできて、笑顔が自然になってきた。

「いい笑顔だねー。その調子、その調子だよ」

パシャッ、パシャッと何度もフラッシュが光る。

綾乃は、言われてもいないのに頭の向きを変えたり、身体の向きを変えたりして、少し乗ってきたようだ。

「はいオーケー！ 普段着はこれでおしまいね。次はオシャレ着を撮るよー」

「はい」

「じゃあ、さっそくだけど着替えてきてもらえる？」

「はい」

綾乃が奥の部屋に入った。岩木が額の汗を拭った。

間もなくして綾乃が出てきた。去年、友人の結婚式の時に買った、濃い水色のミディアムドレスだ。

肩は露出し二本の紐で吊られている。胸元は少しだけ開いていて、スカートの長さはちょうど膝が隠れる程度だ。

綾乃がステージの上に立った。亜沙美が、先ほどと同じポーズを繰り返し、綾乃はそれを真似た。さっきよりも格段に決まっている。

「奥さん素質あるわ。亜沙美よりもポーズが上手いんじゃないの？」

「ええー！ もう亜沙美抜かれちゃったの？」

亜沙美がふくれっ面になった。

「奥さんはクラシックバレエの経験者なんだ。基礎ができてるんだよ。ねえ？」

「でも子供の頃の話ですよ」

綾乃は、まんざらでもない表情だ。

「まさしくダイヤの原石だな。やりがいがあるわー！」

岩木のテンションが上がっている。

無理もない。綾乃は美人なうえにDカップでスタイルもよい。

こんな姿を間近で見せられて興奮しない男はいないだろう。

「次は今回のお決まりポーズを撮ろう。奥さん、スカートの裾をつまんで、両手で横に引っ張ってみてもらえるかな」

「それって、さっきの方もやっていたあれですか？」

「そうです。奥さんは感がいいですね。あのポーズは今回のモデルさん全員にやってもらうことになっているんですよ」

「こうですよね？」

綾乃は言うが早いか、スカートの裾を両手でつまんで広げて見せた。

てっきり、戸惑いや拒否をするのかと思っていたのだが、実にあっさりとして呆気にとられてしまった。

膝下までを隠していたミディアムドレスのスカートからは、膝上数センチまでの色白の脚が顔を覗かせている。

綾乃は普段ミニスカートを穿かないだけに、修二はこれだけでも充分に興奮した。

「いいですよー、奥さん。そのまま片方のつま先を立ててみようか」

綾乃が足を動かし始めた瞬間から、シャッターの連射が始まった。

岩木は中腰になったり、時には地面に座ってシャッターを切っている。

あの角度では下着は見えないだろうが、【狙っている】という雰囲気は伝わってきて、修二の心をくすぐった。

「はい、ありがとうー！ いったん休憩にしよう」

岩木はカメラを丸いテーブルに置くと、スポーツタオルで汗を拭いた。

「奥さんもこちらでお休みください。お飲み物をお持ちしますから」

「はい、すみません」

綾乃はそう言うと、最初に座っていた椅子についた。

亜沙美がオレンジジュースを持ってきて、綾乃の前に差し出すと、綾乃は喉が渴いていたのか、すぐにストローをグラスに差し込んで口を付けた。

亜沙美はもうひとつの椅子に座ると、丸いトレイを膝に抱えてから言った。

「お疲れの所もうしわけありませんが、奥さんにご相談があるんです」

「はい」

「実は、奥さんには別のページも担当していただきたいんです」

「別のですか？」

「今撮影している特集ページとは別に、新商品の紹介ページも奥さんにやっていただきたいんです」

「わたしなんかで大丈夫なんですか？」

「もちろんですとも。っていうか奥さんは理想なんです。まずはいくつかやってみませんか？」

「わたしにできることでしたら、大丈夫ですけど……」

「ありがとうございます。無理なことは言いませんので、できる範囲でお願いします」

「はい、それなら大丈夫です」

「それで、やっていただけるのであれば、もう一つお願いがあるんですが、こちらの誓約書にサインしていただけますか？」

「誓約書ですか？」

「まだ市場には出ていない商品なんかも取り扱うので、それを口外しないって
いう誓約書になります」

「ちょっと見せていただいてもいいですか？」

「はい、どうぞ」

「……あの、ここに、モニターとして登録って言葉があるんですが……」

「ああ、それはですね。一部商品はモニターも兼ねているんです。後程別紙でお
渡しすることになります。新商品のモデルをするにあたって、それらモニター
への登録もしますという事です」

「モニターって大変なんじゃないですか？」

「そんなことはありませんよ。一定期間その商品を利用して、感想を述べるだけ
ですから。それなりに報酬も出ますし、損なことはなにひとつありませんよ」

「そうですか」

綾乃はそう言うと、誓約書にサインをした。

「ありがとうございます。それでは早速ですけど、ニューモデルのドレスを着て
いただけますか？」

「はい」

「ちょっと待っててくださいね」

亜沙美がフレームから消えた。カラカラと音がしたかと思うと、パイプハンガ
ーに吊るされた数着のドレスがフレームインして、綾乃の目の前で止まった。

スカートをよく見ると、かなりのミニのように思える。

「こちらは、マリコリー・コンチェルトのニューモデルのドレスです。つい最近、
ファッションショーで公開されたばかりで、まだ店頭にも並んでいないんです
よ。どうぞ、合わせてみてください」

「かわいいですね」

綾乃はそう言って立ち上がると、ドレスを手にとって自分の身体に合わせた。

「どうぞ、鏡を使ってください」

亜沙美がスタンドミラーを綾乃の前に立てると、綾乃は真紅のドレスと青の
ドレスを両手に取って、交互に見比べた。

綾乃はピンクなどの淡い色よりも、赤や青などのハッキリとした濃い色を好
む。

「お気に入りのものはありましたか？」

「ええ、この色とデザインが好きですね。これって、五着全部着るんですか？」

「一着だけで構いませんよ。全部を載せられるわけではありませんし、他にも着
ていただきたい衣装がありますので」

「そうですか。それじゃあ、これかな」

綾乃は真紅のドレスを選んだ。

「その色なら、ヒールも同じ色で合わせましょうか。さっそくですけど着替えてください」

「はい」

亜沙美から真紅のハイヒールを受け取ると、綾乃は更衣室に消えた。

亜沙美が、岩木に向かって指でOKを作った。

岩木も、ニヤリと笑うとOKを返した。

まさかあの綾乃が、ミニスカートをすんなり受け入れるとは、修二も驚いた。

そして、次の瞬間には、これから現れるだろう綾乃の姿を想像して、早くも股間は破裂寸前であった。

ドアが開いた。

綾乃のすらりと長い足が太ももまで見えて、そして全身が現れた。

左手でスカートを抑えるように小股で歩き、慣れないハイヒールを履いているせいもあってか、どこかぎこちない。

「まあ、奥さん綺麗！ 似合ってるー！」

亜沙美の声がスタジオに響いた。

「そ、そうですか？ 思ったよりスカートの短くて……」

ステージに乗った綾乃は、スカートの裾をつまんで下に伸ばそうとしている。

「大丈夫、大丈夫。奥さんの足はとても素晴らしいよ」

岩木はそう言うなり、早くもシャッターを切った。

「奥さん、ポーズポーズ！」

亜沙美が急かすと、綾乃は戸惑いながらも同じポーズを取り始めた。

少し足を広げるポーズを取ると、ミニスカートがずり上がる。そのたびに綾乃はスカートを直した。

「奥さん、気にしなくていいよ。大丈夫、下着は見えてないから」

岩木はそう言っているが、ずっと床に座ってシャッターを切っている。

もしかしたら、あの角度からは下着が見えているのかもしれない。

一通りポーズを取り終わると、綾乃はそそくさと更衣室へ逃げて行ってしまった。

よほど恥ずかしかったのだろう。綾乃にとってはこれが限界なのかもしれない。

カラカラと音がして、亜沙美がフレームインした。

パイプハンガーには、ジャージや水着が吊るされている。よく見ると一番端にあるのは下着だろうか。

今度はそれらを着せようというのだろうが、ジャージはともかくとして、水着

や下着などは絶対に無理だろう。

綾乃が出てきた。黄色いTシャツにジーンズ姿だ。

「奥さん、こちらへいいですか？」

「はい」

「他にも着ていただきたいものがいくつかあるんですが、この下着なんかはどうでしょうか」

亜沙美は、ピンク色の下着を手にとると、綾乃に渡した。

「ごめんなさい。下着は無理です」

綾乃は、下着を見もせず、亜沙美に返した。

「うーん、このショーツはレースでかわいいんですよ」

亜沙美は綾乃から下着を受け取ると、ショーツを広げて見せた。

あのデザインでは、ヘアが透けるかもしれない。

下着を戻すと、黄色い水着を手にとった。

「水着ならどうですか？」

「これってビキニですよ？」

「そうですね。奥さんは海には行かないんですか？」

「泳ぎには行かないですね」

「じゃあ普段水着は着ないんですね。記念に着てみませんか？」

「ビキニはちょっと……」

綾乃の表情は、あきらかに困った顔をしている。

「それなら競泳用の水着ではどうでしょうか？ 露出の少ないセパレートタイプの水着もあるんですよ」

「それならあまり抵抗はありませんけど、今日は水着を着るなんて思っていなかったものですから……」

「そうですね。突然言われても困りますよね。それじゃあ、次回ってことでもいいですか」

「はい」

綾乃は、あっさりとして次回の約束をしてしまった。着ずに済んで安心したのか、流れのまま返事をしたのかは不明だが、これで次回の撮影時には、必ず水着を着なければならないだろう。

「スポーツウエアなら今日でも大丈夫ですよ？」

「ええ、これでしたら」

「ジャージとスパッツはセットなんですけど、平気ですか？」

「ええ、スパッツなら昔はよく穿いていましたし」

「よかった。それじゃあ早速ですけど、まずはジャージからお願いしますね」

渡されたのは、上下白のスタンダードなタイプである。

ジャージ姿での撮影は、先ほどのポーズとは違い、運動を意識したポーズが多い。

走るような格好をしてみたり、立ったまま片膝を抱き上げるストレッチをしてみたりと、創作ダンスを踊っていた時の活発的な綾乃を思い出した。

「奥さんありがとう。そろそろ時間も迫ってきたから、続けてスパッツもお願いしてもいいかな」

岩木が時計を見ながら言った。

「はい、大丈夫です」

「上にはこのTシャツを着てくださいね」

亜沙美は、黄緑色のスパッツと共に、白いTシャツを手渡した。

綾乃が更衣室に消えると、すぐにドアが開いた。時間がないと言われて、少し急いだのかもしれない。

白いTシャツに、太ももの半分までが隠れる黄緑色のスパッツは、綾乃のお尻の形をなまめかしく浮きださせて、とてもセクシーだ。

ステージの上に乗ると、岩木がファインダーを覗いた。

「あれ？ 奥さん。下着を付けているよね？」

「え？ ええ、もちろん付けていますけど……」

「奥さん。商品の宣材写真としては、下着のラインはご法度なんですよ。わかりやすさで言えば、カタログに載っているストッキングのモデルさんを思い出してほしいんだけど、下着を履いている人はいないよね？」

「そ、そこまで意識して見たことは無いですけど……」

「亜沙美、何かいいパンフレットは無いかな」

「ありますよ。これだとわかりやすいと思います」

亜沙美は、チラシを大きく広げた。

あれはよくポストに投函されている、通販会社のパンフレットだ。

亜沙美はチラシを綾乃の目の前まで持って行くと、一点を指差して、

「こういうやつですよ。ショーツは履いてないですよね？」

「……ええ、そうですね」

「この業界にはこういう決まり事があるって、その商品がよくわかるように、ショーツは付けられないことになっているんです」

「そうなんですか……」

「下着のラインが有るか無いかの違いでしかないですから、別に平気ですよね？」

「ですけど、抵抗があります……」

「大丈夫ですって。下着のラインがある方が、かえって格好悪いですよ。それに、これもモニターの仕事だと思って、がんばりましょうよ」

亜沙美は一気にまくし立てた。

「……そうですよね」

綾乃は相当戸惑っていたようだが、どうやら納得したらしい。

ゆっくりと歩きだして、更衣室に消えた。

亜沙美が親指を立てると、岩木も親指を立てた。

スパッツの直穿き。この先にはいったい何が待っているのだろう。

修二は期待だけで発射寸前だったが、耐えることにした。

ドアが開いた。綾乃が歩いてくるが、どことなくぎこちない。

映像がズームになった。綾乃のスパッツの部分を画面いっぱい映している。

「じゃあ、さっきのように動いてみようか」

岩木が言うと、綾乃は走るようなポーズを取ったり、立ったまま片足の膝を抱えるストレッチをした。

そして、その足を下ろした時、明らかに変化が起きていた。

女性特有の淫靡なクレバスが、ハッキリと浮き出ているのである。

修二はたまらず射精した。それでも映像から目が離せない。

綾乃はそんな事にも気づいていない様子で、さらにポーズを続けた。

動けば動くほどクレバスは深くなり、床に座ってストレッチを始めた時には、お尻のワレメと女性器のクレバスが、くっきりと一本に繋がっていた。

シャッター音は鳴りやまない。

「奥さん、バレエを見せてくれない？」

岩木が言った。

「子供の頃ですから、あまり上手ではないですよ？」

「気にしない気にしない。ちょっとやってみてよ」

「はい」

綾乃はすっと立ち上がると、バレエの基本ステップのようなものを踏み出した。その間もずっとクレバスは浮き出ている。

スニーカーでつま先立ちになり、手を大きく伸ばした姿は、見惚れるほど美しかった。

「こんな感じです」

綾乃の額にはうっすらと汗が滲んでいる。

「上手い下手はわからないけど、美しかったよ」

岩木のシャッター音は止まらない。

「ありがとうございます」

「創作ダンスもやってたんだよね？」

「はい」

「ちょっと踊れる？」

「踊るんですか？」

綾乃は困ったように微笑んだ。

「少しでいいからさ。創作ダンスってどういうものか見てみたいんだ」

「それじゃあ、少しだけなら……。ここから降りますね」

綾乃は舞台から降りると、ダンスを始めた。

あれは、大学時代に賞を取ったダンスだ。

クラシックバレエの経験を生かした、しなやかであり、時に激しいステップのダンス。

綾乃が言うには、鹿をイメージしたダンスらしいが、修二にはわからなかった。

一通り踊り終わると、綾乃は舞台に戻った。

肩で息をして、額の汗を手の甲で押さえている。

映像が再びスパッツをズームした。

汗を吸った黄緑色のスパッツの色がまだらに変色していて、股間の部分がうっすらと黒くなっているように見えた。いや、これはヘアが透けているのだ。

「そのまま腰に手を当てて」

岩木のシャッター音が続く。

きっと、綾乃のヘアと深く潜り込んだクレバスをズームで撮っているに違いない。

先ほど射精したばかりなのに、もう勃っていた。

あの清純な綾乃が、他の男の前でヘアとクレバスを晒しているのだ。

「奥さんって、Y字バランスもできちゃったりするんですか？」

亜沙美が聴いた。

「昔はできましたけど、最近はやってないので、どうでしょう」

綾乃はそう言うと、おもむろに右足を持ちあげた。

ピンとつま先まで伸びて、見事なY字バランスである。

「凄いねー！ 少しそのまま我慢して」

岩木はシャッターを押し続ける。

映像がゆっくりと回り込んで、ズームになった。

浅くなった一本線は健在だが、秘肉を覆い隠すヘアまでは確認できなかった。

綾乃が足を下ろした時、さらに深いクレバスが姿を現した。

さすがにここまで食い込むと、綾乃も違和感を覚えているかもしれない。

「はい、奥さんありがとー！ 今日の撮影はこれで終わりです」

「はい。ありがとうございました」

綾乃が更衣室に向かった。

映像は、綾乃のお尻のワレメを鮮明に映していた。

画面が暗くなった。映像はこれで終わりのようだ。

修二は、もう一度映像を見直して、壮絶に果てた。

修二には、どうしても気になることがあった。

それはトイレや更衣室に、隠しカメラはないのかという事だ。

時計は二十三時を回っている。迷ったが篠塚に電話した。

『はい、篠塚です』

『夜分にすみません。宇海です。こんな時間にすみません』

『大丈夫ですよ。私はいつも二時までは起きていますので。ところで、映像はご覧になりましたか？』

『はい、今見終わりました。興奮しすぎて卒倒しそうです』

『喜んでいただけただけで何よりです』

『あのう、ひとつ聞いてもいいですか？』

『なんでしょう？』

『トイレや更衣室には、隠しカメラは無いのでしょうか？』

『ああ、それはよく聞かれますが、残念ですがありません』

『そうですか……』

『うちが寝取り専門なら隠しカメラを仕掛けるという手もあるんですが、何せご近所付き合いもありますから、本物の雑誌社の方も利用される手前、そういうものを仕掛けるのは危険なんです』

『そうですよね。もしあるとしたらその映像も見たいと思っただけです』

『宇海さん。そんな隠し撮り映像よりも、もっといいものがきっと撮れますよ』

『はい。どうぞよろしくお願いします』

残念だ。その思いだけが心の中で強く残っていた。

翌朝、綾乃の顔をまともに見ることができなかった。

「どうしたの？」

と声を掛けられるだけで、心臓がドクンと鳴った。

「タベは寝付けなかったから、眠いんだ」

「どうかしたの？」

「実は大きな契約が取れてさ」

修二は、社長賞の話もしたが、五十万円と嘘をついた。

「まあ、凄いわね」

「でも、実際に貰うまでは期待しないようにしてる。気が変わる人じゃないけど、ぬか喜びはしたくないしね」

「そうね。わたしの方も安定した収入が貰えるようになれば、愛里ちゃんの将来

も安心よね」

「モデルの仕事をするの？」

「さっきメールが来て、正式にお願いされたんだけど、でも次の撮影では水着にならなくちゃいけないくて、正直言うとまだ少し迷ってるの」

「水着はさすがに恥ずかしいのか？」

「それもあるけど、お腹も気になるし、色々とお手入れもしなくちゃならないし」

「エステに行くならお金は出すよ」

「ううん。エステならモニターでお願いされてるから、その気ならいつでもうけられるの。ねえ、修ちゃんはどう思う？」

「俺は綾乃の身体は誰よりも美しいと思うよ。決して恥ずかしがるようなものじゃないさ」

修二は、荒ぶる息を殺して平静を装っているせいで、頭がクラクラしてきた。

「そう？」

「うん。それで恥ずかしがっていたら、他の人が気の毒だよ」

「それは褒め過ぎよ。でもわかったわ。やるだけやってみる」

修二の心臓は、雷が落ちたかのようにドンッと鳴った。

綾乃は、ティッシュで愛里の口を拭いている。

修二はトイレに駆け込んで、朝から一発抜いてしまった。

綾乃が水色のワンピースを着て、修二を見送ってくれた。

今日は二回目の撮影会で、十時には家を出るらしい。

愛里を保育園に預ける話も出たが、綾乃がモデルの仕事をする間は、修二の母が面倒を見てくれることになった。

会社に行くと、社長室に呼ばれた。

分厚い封筒を手渡しで渡され、

「これで、奥さんにもばれずに自由に使えるだろう？ この分の税金も気にしなくてもいいからな」

と、社長にポンと肩を叩かれた。

「あ、ありがとうございます」

「気晴らしに風俗でも行くといい。これだけあれば、何回行けるだろうな」

社長はそう言うと、歯をむき出しにして下品に笑った。

「はい」

修二は愛想笑いをした。修二は風俗が嫌いなのだ。

社長室を出ると、すぐにATMに向かった。

この大金を持ち歩く気にはなれず、五十万は給料用に作った口座に入金し、残りは学生時代から持っている、綾乃の知らない口座に振り込んだ。

仕事が終わる、いつもの時間に家に帰ると、普段通りに綾乃が玄関まで迎えに来た。

「ただいま」

「おかえりなさい」

綾乃は修二から鞆を受け取ると、リビングに向かった。

靴を脱いで玄関を上がると、綾乃の残り香が、今まで嗅いだことのない良い匂いがした。

「愛里は？」

「もう寝てるわ」

綾乃はそう言いながら料理を運んだ。今回の夕飯は手作りのようだ。

「何時に終わったの？」

「夕方位かな」

「忙しいときは店屋物でもいいんだよ」

「ううん、これはお義母さんが作ってくれたの。本当は出前を取ろうと思っていたの」

「そうか。母さんの料理を食べるのは久しぶりだな」

修二は、ひじきの煮物を口に運んだが、撮影の結果が楽しみ過ぎて、あまり味がわからなかった。

入浴を終えて自室に入った修二は、さっそくメールチェックした。

篠塚から前回同様のメールが来ていて、今回は三つのファイルが添付されていた。

早速一つ目のファイルを開いた。

映像は、車窓越しに我が家の玄関を映していた。

亜沙美がチャイムを押すと、すぐに綾乃が現れた。

映像は、後部座席の盗撮カメラに変わった。

ドアが開く音がして、チノパン姿の亜沙美がカメラの前を横切ると、続いて綾乃が現れた。

ちょうどカメラの真正面に綾乃は座ったが、ロングのワンピースのせいで、脛までしか見えない。

「奥さん、まずは紹介しますね。そちらがジュリちゃん、カメラを持っているのがミキちゃんです」

亜沙美が言うと、運転席から三十代ほどの女性が振り返って頭を下げた。

「はじめまして」

綾乃が丁寧に頭を下げた。

「今日は女性陣だけでお迎えに上がりました。今日の撮影について、男性がいると話しにくいこともありますからね」

亜沙美が言い終わるとほとんど同時に、車は走り出した。

「今日は水着の撮影をお願いすることになるんですが、その前にエステでお肌を磨いていただこうと思います」

「やっぱり、その方がいいですか？」

「奥さんの肌は今でも十分にきれいですけど、もっとつやつやになりますよ」

亜沙美は、綾乃の手を取って腕を撫でた。

「子供を産んでから、少しお腹もたるんだような気がするんですよ」

綾乃がそういうことを気にするなんて、修二は意外だった。

「ウエストは、マイナス五センチくらいにはできますよ。それから、永久脱毛もしてみましよう」

「腋ですか？」

「腋もですけど、Vラインとかもです」

「Vラインって、ここですよ？」

綾乃が両手で自らのVラインを摩る仕草をした。ぐっとくるものがある。

「そうです。今日の撮影にあたって、お手入れの方はされましたか？」

「え、ええ、まあ、少しは……」

綾乃は恥ずかしいのか、笑顔が少しひきつっている。

昨夜の入浴中に、綾乃がVラインの手入れをしていたのかと思うだけで、胸がはちきれんばかりになる。

「水着からハミ出しちゃうといけないから、エステで一緒にやっちゃいましょう。その方が絶対にいいですよ」

「……そうですよね。お願いします」

綾乃は、何ともつかない表情をしている。

映像が一瞬暗くなり、再び明るくなった。

車が止まった。どうやら無駄なシーンはカットしているようだ。

綾乃がドアを開けて降りようとした瞬間、足が大きく開かれた。

ロングのスカートが大きく開いて、薄暗くも白い下着が見えた。

綾乃の下着姿は何度も見たことがあるが、これはこれで感慨深いものがある。ましてや、自分以外の男たちにも見られているかと思うと、それだけで興奮した。

亜沙美が降りて、カメラも慌ただしく降りた。

会社の玄関を開けると、作業服を着た男性が二人ほど見えた。

「あれ？ まだですか？」

「すみません、作業が遅れておりまして、お昼くらいまで掛かりそうです」

「ええー、そうなんですかぁ？ 仕方がないなあ。奥さん、スタジオに行ってもらえます？」

「はい」

綾乃が階段を降りた。映像が暗くなった。

すぐに映像は明るくなって、綾乃は椅子に座ってオレンジジュースを飲んでいた。向かいには亜沙美が座っていて、テーブルには小さな白い紙袋が置いてある。

「本当は今日の帰りにお渡ししようと思っていたんですが、エステルームが使えないので、先にお話ししておきますね」

亜沙美はそう言うと、紙袋から何やら取り出して、綾乃の前に並べた。

あれは恐らく化粧品だろう。使い方を説明しているようだが、修二には聴き慣れない単語が飛び交っていて、よくわからなかった。

「一週間程度使っていただいて、感想を書いて提出してください。他にもモニターしてほしい商品はたくさんあるんですけど、その時が来たらお話ししますね」

「はい。わかりました」

白い小さな紙袋にしまわれたそれらを受け取った綾乃は、持ってきたバッグにそっと入れた。

ガタンと音が鳴った。足音が聞こえる。

「あれ？ どうしたんだ？」

岩木の声だ。

「それが、作業が遅れてるみたいで……」

「そうなの？ いつまで掛かるんだ？」

「なんでも昼まで掛かっちゃうみたいないんです」

「まじかよ。ずいぶんと予定が狂っちゃうなあ。仕方がないか。奥さん、肌の露出が少ない水着なら、今撮っても平気かな？」

岩木が綾乃に聞いた。

「え、ええ。もともとはそのつもりでしたし」

「よかった。じゃあお願いしようかな。亜沙美、準備お願いね」

「はい」

亜沙美が席を立ちあがって、パタパタとどこかへ行った。

綾乃はその場で立ち上がり、少しソワソワしているようだった。

「お待たせしました。こちらでお願いします」

亜沙美が手にしているのは白い布きれだ。

綾乃はそれを受け取ると、少し戸惑ったように、

「あのう。この間の青い水着ではないんですか？」

と聞いた。

「ごめんなさい。この間の水着は三十代の奥様が着てしまわれて、残りはこれしかないんですよ」

「そうなんですか……。あの、これって、透けないですよね？」

「大丈夫ですよ。超一流の有名ブランドですよ。その辺はちゃんとしているはずですよ」

「そうですよね……」

「更衣室で着てみて、何かあったら呼んで下さい」

「はい」

綾乃は納得したように頷くと、更衣室に入って行っただが、なかなか出てこなかった。

亜沙美が更衣室の前に駆け足で向かった。

「奥さん、大丈夫ですか？」

と、問いかけると、微かに、

「サイズが……」

と聞き取れた。

「サイズが小さいですか？ ちょっと入りますね」

亜沙美が更衣室に入ると、

「少し小さいですよね」

という綾乃の声がハッキリと聴いて取れた。

亜沙美には、隠しマイクが仕掛けられているのだろう。

「サイズ的には合っていると思いますよ。競泳用なので、身体にぴったりフィットする作りになっているんです。小さく感じられるかもしれませんが、合っていると思います」

「そうですか……」

「大丈夫ですね。透けてないです。行きましょう」

「はい」

亜沙美が出てくると、そのすぐ後から綾乃が出てきた。

まず真っ先に目が行ったのは、Dカップの胸である。

よく見ると、わずかに突起が浮き出ているように思えた。

そして次は腰回りだ。

本能的にクイコミを探すが、さすがにそれは無かった。

「すごい迫力だね。まるで水泳の選手だ」

岩木がシャッターを押した。

綾乃は恥ずかしそうに両手を前で組んでいる。

「奥さん、大丈夫だって。それで恥ずかしがってたら、水泳の選手に失礼だよ。奥さん、右手を腰に当ててみようか」

岩木に言われるがまま、綾乃はポーズを取って見せた。
「よし、次は後ろ姿を撮るから、そのポーズのまま背中を向けて」
綾乃がゆっくりとターンした。
バレエと創作ダンスで鍛え上げられたふくよかなお尻が、うっすらとワレメを浮かべている。
ドアの開く音がした。
パタパタとスリッパの音が聞こえて、ジュリと呼ばれる女性が入ってきた。
「亜沙美ちゃん電話」
「はい」
亜沙美は電話を受け取ると、声を潜めることもなく話し始めた。
『お世話になっております。……はい。……はい。ええ？ そうなんですか？
……はい。……はい。……わかりました。お願いしてみます。では失礼します』
持っていた携帯をジュリに渡すと、
「奥さん、岩木さん。その水着なんですけど、リクエストが入ってしまいました」
「リクエストってなんだ？」
岩木が聞いた。
「水に濡らして欲しいそうなんです」
「なんでまた」
「カタログの中表紙用だそうです」
「そうか。だが、奥さんはにとっては負担だろう」
「でも、メーカーからの要望なので、断れなかったです」
「しかし、今の室温じゃ耐えられないだろう。クーラーと空調を切って、ぬるま湯を使えばなんとかなるかな」
岩木は綾乃の方を見て言ったが、綾乃は身動き一つしなかった。
「私、お湯沸かしてきます」
ジュリがそう言うと、フレームから消えて、ボタンとドアが鳴った。
「エアコン消しますね。奥さん、ほんの少しだけ、霧吹きでお湯を掛けますけど、いいですか？」
「え、ええ。仕方がないですよ」
綾乃は眉をひそめて困惑している様子だ。
「本当にすいません。風邪をひかないようにできるだけ早めに済ませますから」
「なあ、亜沙美。霧吹きじゃあお湯だろうと寒いだろう。それなら身体を温める意味でも熱めのシャワーにしないか？」
「その方がいいかもしれませんね」
「モニター商品のなかに、キャンプ用の簡易シャワーがあっただろう。あれを使おう」

「岩木さん、ナイスアイデアです！ それじゃあ、ビニールプールも持ってきませぬ」

「ああ、透明のやつにしてくれよ。反射があるからな」

「わかってますって。すぐに用意します」

パタパタと歩く音がして、ドアの開閉音が聞こえた。

「奥さん。悪いけど、もう少しだけ待ってね」

「はい……」

綾乃はあっさりと返事をした。これだけの準備が進めば、今更できないとは言えないのだろう。

映像がすうっと暗くなって、再びすうっと明るくなった。

ビニールプールの中には綾乃が立っていて、その横には簡易シャワーを手に持った亜沙美が立っている。

「じゃあ、シャワーを当てて全身を濡らしたら、数カット撮ってすぐに終わらせるからね」

「はい」

「ポーズはさっきのポーズでいこう。そのままじっとしていいからね」

「はい」

綾乃が片手を腰に当てるポーズをとった。

「じゃあいけますよ」

亜沙美が言うと、シャワーから勢いよくお湯が噴き出した。

お湯はわずかに湯気をあげながら水着に浸透し、真っ白な生地は十分に水分を含んで、綾乃のDカップの先端にある突起物を強く浮き上がらせた。

さらに、お臍の窪みを浮き上がらせ、ついにはヘアまでをはっきりと映し出してしまった。

シャッター音が鳴り響いている。

「熱くはありませんか？」

亜沙美はシャワーを止めて、綾乃の顎のあたりに着いた水滴をタオルで拭いた。

「奥さんそのまま、カメラをじっと見ていてね」

シャッターは鳴り響く。

綾乃は、プロのモデルのような表情で、カメラから視線を逸らさないが、バストトップとヘアを完全に透けさせているそれは、まるで成人雑誌のグラビアのようであった。

その言葉を最初に言い出したのは、岩木であった。

「あれ？ その水着、欠陥商品じゃないか？」

「え？ あっ、奥さん」

亜沙美が視線を下の方にやると、綾乃はつられるように下を向いて、
「きゃあっ！」

と叫んでしゃがみ込んだ。

「なんだよこれ。うちのモデルに恥をかかせやがって。おい、ジュリ」

「はい」

「メーカーの担当を呼び出せ。文句を言ってやる」

「ダメですよ。こういうことがあるからこそモニターが必要なんです。奥さんにはお気の毒ですけど、奥さんのおかげで、この商品には欠陥があることが判明したじゃないですか」

ジュリは白々しく言うと、真っ白いガウンを綾乃の肩から掛けた。

「奥さん、すみませんね。こういう事って滅多に無いものですから、私たちも事前にテストはしないんですよ」

「あの……、写真とか、そちらのビデオとか、消していただけますよね？」

「写真の一部は報告として必要になりますけど、奥さんの顔は見せません。映像の方は責任をもってカットさせていただきます」

亜沙美が答えた。

「奥さん、着替えましょう。この水着はたぶん脱ぎにくいので、私が手伝います」

ジュリはそう言うと、綾乃の肩を抱いて更衣室に向かった。

ここで一つ目のファイルが終わった。

修二はもう一度再生して、ヘアの透けた綾乃の場面で一時停止をした。

綾乃とは二晩しか共にしていないし、まじまじと見ることもできなかったが、ヘアは濃い方だというのが修二の印象だ。

今こうしてじっくり眺めると、ヘアの生えている範囲も、美しい顔に似合わず、少し広めのように思える。

修二は、抜きたいのを我慢して、二つ目のファイルを再生した。

亜沙美が黄色いビキニをビデオカメラの前に示した。

そして、更衣室へ向かうと、ドアを叩いて中に入って行った。

「脱げましたか？」

という音声が流れてきた。

「ええ、何とか」

「ショックを受けているかもしれませんが、もしできればビキニの撮影に入ってもいいですか？」

「少しだけ待ってもらってもいいですか？」

「もちろんです。気持ちの整理がついたらで構いません」

「すみません」

「謝らないでください。悪いのはこちらなんですから。それとも、今日はもうやめますか？」

「いいえ、大丈夫です。これから着替えます」

「本当はエステから先に受けていただきたかったですけど、まだ使えないみたいで、でも、カミソリも用意していますから」

「はい……」

「それじゃあ、この水着になりますので、よろしくをお願いします」

「はい」

微かな雑音が聴こえる。

「わあ、奥さんのお尻きれ一い」

「そ、そうですか？」

「ツルツルのもち肌じゃないですか」

「……」

「念のためヘアのチェックをしますね。……少しハミ出しちゃってますね。剃りましょうか」

「えっ、あっ、ご、ごめんなさい……」

「いいの、いいの。じっとしててくださいね」

「あの、自分でやりますから……」

「私に任せてくださいって。これも私の仕事なんですから」

「す、すみません」

「動かないでくださいね」

「はい……」

音が途絶えた。いや、微かにノイズが聞こえる。沈黙しているのだ。

「とりあえずはこんなものかな。ジュリちゃんはどう思います？」

「あまり大きな動きさえしなければ、これでも大丈夫だと思います」

「よし。それじゃあ、奥さん。気を付けてくださいね」

「はい」

ドアが開いた。

真っ白いガウンを着た綾乃が歩いてくる。

「奥さん、さっきの写真は一枚以外は全部処分したからね」

岩木はそう言うと、早くもカメラを身構えた。

「はい、すみません」

「それじゃあ、撮ってしまおう」

「はい」

綾乃がガウンを脱いだ。

比較的面積の少ない黄色いビキニで、綾乃がこれを着ていることが不思議で

仕方がない。

プロのモデルという意識がそうさせているのか、それとも場の雰囲気流されているのか、あれほど過剰な肌の露出を嫌っていた綾乃からは、まるで想像できない姿だ。

フラッシュが何度もたかれ、綾乃はいくつのもポーズを付けた。

自宅での自主練習が功を奏したのか、その姿はまるでプロのモデルそのものだ。

「よし、ビキニはこれで充分だ。奥さん、ついでに下着もやっちゃおうよ」

岩木が、首からかけたタオルで汗を拭いながら言った。

「あのレースのやつですよ？」

「そうだけど、あれは撮影用の下着だから、実は肌色の裏地が付いていて透けないようになっているんだよ。今着ている水着よりも、実は露出は少ないんだ」

「そうなんですか？」

「着てみたらいいですよ。嫌だったらやめちゃえばいいんです。行きましょう」

亜沙美がフレームインしてきて、綾乃を連れて更衣室に消えた。

ガサゴソと音がすると、

「ね？ 大丈夫でしょ」

という声が聴こえてきた。

「そうですね」

「さっきの水着の方が露出は大きいですよ。大丈夫です。行きましょう」

「はい」

ドアが開いた。

亜沙美が出てきて、そのすぐ後から綾乃が出てきた。

ガウンを持ち込まなかったのも、いきなり下着姿だ。

舞台上になると、岩木がシャッターを押した。

「いやー、カメラマンをやっているのが本当に良かった～」

と言って、時には床に転がりながら、あらゆる角度からフラッシュを連発した。

映像が、綾乃のDカップにズームアップした。

レースのブラジャーをよく見ると、うっすらとだが乳輪が透けていた。

ヘアの事ばかりに気を取られて、バストのことなど頭になかったのだろう。

水着でもシルエットこそさらしたが、ついに生の色の乳輪を他の男たちに晒してしまったのである。

下着の撮影が終わると、二つ目のファイルはここで終わった。

修二はすぐに三つ目のファイルを再生した。

映像は、ベッドを天井から見下ろしている。

亜沙美が歩いてきて、そのすぐ後ろから綾乃が付いてきた。
「今日はお疲れ様でした。あとはゆっくり、リラックスしてってくださいね」
「はい。実はエステも楽しみにしていました」
「それはよかったです。それじゃ早速ですけど、そちらの更衣室で服を脱いで、その紙パンツを履いてきてください」

「はい」

綾乃が画面の下へと消えて行った。

しばらくして、綾乃が戻ってきた。真っ白なバスローブを着ている。
「それじゃあ奥さん、ローブをカゴに入れて横になってください」

「はい」

綾乃はバスローブの結び目をほどくと、あっさりと脱いでカゴに入れた。

Dカップの豊満な膨らみから、ピンク色の突起が確認できる。

ベッドの上に寝ても、その膨らみは形を保った。

下には紙パンツを履いているが、うっすらと黒ずんでいるようにも思える。

「バストアップからいきますね」

亜沙美は筒状の容器から液体を手にとると、両手で丁寧にすり合わせてから、綾乃の左のバストを優しく包み込むように触れた。

しかし、バストトップに触れることは無く、滑らかな手つきで下から上へと絞り上げた。

綾乃は眉間にシワを寄せている。感じているわけではないと、修二にはわかった。

「どうですか？」

亜沙美は一寸も手を止めることなく聞いた。

「ごめんなさい。胸を触られるのが駄目で……」

「くすぐったいですか？」

「くすぐったくはないんですけど、母乳マッサージの不快感がまだ残ってるんです」

「母乳マッサージって、母乳がよく出るようにするためのマッサージですよね？」

「そうです。あれって結構痛いんですよ」

「もしかして、まだ痛むんですか？」

亜沙美は手を止めて聞いた。

「痛みはもうないんですけど、でもトラウマっていうのかな。気持ちが悪くなっちゃうんです」

「そうなんですか。それじゃあこっち側はこれでやめておきますね。でも、バランスがあるから、こっちの方も少しだけやらせてください」

「はい……」

亜沙美はさらに手に液体を取ると、今度は右側のバストをマッサージした。

綾乃は眉間にシワを寄せて耐えている。先ほどと同じような動作をすると亜沙美は手を止めた。

「バストマッサージはこれで終わりです。あと、モニター商品になるんですけど、このクリームを塗ってもいいですか？」

「それは何のクリームですか？」

「脱色素クリームです。簡単に言うと、黒ずんだバストトップをピンクにするためのクリームになります。奥さんは比較的きれいですが、子供を産む前はもっとピンク色だったんじゃないですか？」

「そうなんですよね。妊娠すると黒ずむんですよね」

「だったら悩む必要もないですよ。使っちゃいましょう」

「はい、お願いします」

「ありがとうございます。準備はすぐできますので」

亜沙美はそう言うと映像の下側に消え、カラカラと台を押して現れた。

そして、カゴに入っていたデジカメを手にとると、おもむろに綾乃のバストを撮影した。

「えっ？」

綾乃は瞬間的に左腕でバストを隠すと、亜沙美に戸惑った視線を向けた。

「モニター商品なので、使用前後の写真が必要なんです。大丈夫です。奥さんの顔は写っていませんから」

亜沙美はデジカメを操作すると、モニター側を綾乃に見せた。

「男の人たちには見せませんか？」

「見せませんよ。って言うか、私しか見ません。もちろん、メーカーには渡しますが、奥さんがモニターだってことは絶対にわかりません」

「本当ですか？」

「もちろんです。プライバシーが守られなかったら大変なことになる世の中ですよ。信じてください。それよりも時間が無いから、クリームを塗っちゃいますね」

「……はい」

「少しひんやりしますよ」

亜沙美は小瓶の蓋を開けると、人差指の爪で白いクリームをすくった。

そのまま、綾乃の左胸のトップに乗せると、淫靡に人差指を往復させて、バストトップをプルプルといたぶった。

「どうですか？」

「どうって言われても……」

綾乃はちよくちよく首を持ち上げて、胸の方を見ている。

「気持ち悪いですか？」

「気持ち悪くはないです」

「バストトップは立ってるんですけどね……。奥さんって、くすぐったいとかはありますか？」

「くすぐったい所はあります」

「例えばどの辺ですか？」

「お腹の横とか……ですかね」

「腋の下とかは？」

「あまり感じないですね」

「そうなんですか」

亜沙美はそう言いながら、おもむろに綾乃の両横腹をくすぐった。

「きゃっ、やめて、くすぐったい」

綾乃が身体をよじった。

「いいえ、やめません。こちょこちょこちょこちょ～」

亜沙美はより一層、横腹をくすぐった。

「あははは、だめ、くすぐったいから。も、もう、やめて」

「ここはどうですか？」

亜沙美は手を太ももに移動すると、素早く握ったり離したりを繰り返した。

「いやー！ くすぐったい！」

綾乃は上体を起こして、亜沙美の手を掴んだ。

「ほら一、ここにもくすぐったいところがあつたじゃないですか」

「も、もうやめてください」

「もうやめましょう、ってウソー！」

起き上がっている身体の横腹を再びくすぐった。

「ちょっと、亜沙美ちゃん！ あははははは」

綾乃はベッドに寝転がった。

「奥さん落ちちゃいますよ」

亜沙美は、綾乃の両腋に手を伸ばしてくすぐり出した。

「きゃー！ くすぐったいから、も、もう……」

綾乃は、亜沙美の手をどかせようと必死だ。

「ほら一、ここだってこんなにくすぐったいじゃないですか」

亜沙美は、ようやく手を止めた。

「こ、こんなにくすぐったいだなんて、知らなかったんです」

「奥さん、もう一回仰向けで寝てもらえます？」

「も、もうくすぐらないですよね？」

そう言いながら、綾乃は枕に頭を付けた。

「もう一回、マッサージしますね」

亜沙美がそう言って、綾乃のバストトップを人差指でコリコリと刺激をすると、綾乃の眉間にシワが寄った。

「どうですか？」

「な、なんだか少しくすぐったいです」

「やっぱり……」

「やっぱりって何がですか？」

「奥さんはまだ開発されていないんですよ」

「開発？」

「そうです。女性の喜びを知らないんです」

「どういう意味ですか？」

「それは口ではうまく言い表せられないので、あとで説明しますね」

亜沙美がバストトップをつまみ上げた瞬間、

「あっ」

という声が、綾乃の口から洩れて、綾乃は慌てて口を塞いだ。

「バストマッサージはこのくらいにしておきましょう。次は全身オイルマッサージに入りますね」

「はい」

「少し冷たいですよ」

ボトルから滴り落ちるオイルが、亜沙美の手のひらを一瞬の受け皿として、綾乃のお腹へと落ちて行く。

そのたびに、綾乃の身体はわずかながらにビクッと動いた。

亜沙美が、プロのマッサージ師さながらの手つきで、綾乃のお腹を揉み始めた。綾乃は少し顔を歪めるが、それでも完全に身を任せている。

お腹のマッサージが終わると、今度は紙パンツに大量のオイルを落とした。

とたんに、綾乃の黒々としたヘアが現れた。

「下腹部に行きますね」

亜沙美は紙パンツを少し持ち上げると、その中へ手を滑り込ませた。

ヘアに触れるか触れない位置で、下腹をこねている。

やがて、太もも、ふくらはぎ、足の指まで進み、今度は綾乃をうつ伏せにした。

首、背中、腰、臀部、ふともも、ふくらはぎ、足の裏。

再び綾乃が仰向けに寝たとき、紙パンツは綾乃の肌色までをも透けさせていた。

「マッサージはこれで終わりになります。一度、シャワーを浴びてもらって、それから脱毛になります」

「はい」

綾乃が籠の中のバスローブを持ってフレームアウトすると同時に、映像もフェードアウトした。

映像が明るくなると、綾乃はベッドに仰向けに寝ていた。

新しい紙のブラジャーに、紙パンツ姿だ。

亜沙美がやってきて、

「レーザーが目にあたらないようにアイマスクをしますね」

と言って、綾乃の目にアイマスクを掛けた。

大きな装置を動かすと、亜沙美はサングラスのようなものをかけて、綾乃の左腕を持ち上げ、腋の脱毛を始めた。

どんな事をしているのかよくわからないが、綾乃の無防備な姿に、修二の心臓はずっと強く打ち付けている。

両腋の処置が終わると、おもむろに紙ブラジャーをずらした。

綾乃のDカップのバストが再び晒される。何も付けていなかった時よりも、紙ブラジャーからこぼれ落ちているその姿の方が、何倍も卑猥である。

先ほどまで腋の下に当てていた装置を、バストトップに当てている。確かに女性でも乳輪の周りから体毛が生えていることがあるが、性交渉など頭のない綾乃は、その辺のお手入れには気が回っていないのかもしれない。

綾乃の頭が動いた。

「くすぐったいですか？」

「少し……」

「もうすぐ終わりますから、我慢してくださいね」

亜沙美は、お構いなしに処置を続けた。

綾乃の足がモジモジと動いている。

あれほど鈍感だった綾乃が、亜沙美にくすぐられてからというもの、敏感になっているように思える。

バストトップの処置が終わると、亜沙美は紙ブラジャーを元に戻した。

そして、大きな装置を動かして、綾乃の下腹部へと進んだ。

「失礼しますね」

亜沙美の手が綾乃の紙パンツに掛けられた。

下へ引きずり下ろす時、綾乃が腰を浮かせた。

黒々としたヘアが現れ、そして全体が晒された。

亜沙美が施術を始める。

亜沙美の頭に隠れて、どういう状態になっているかはわからないが、綾乃はくすぐったいのか、時々頭を動かした。

長い時間が流れて、亜沙美が頭を起こした時、そこにはくっきりとした縦線が姿を現していた。

クレバスの先端に、申し訳程度にヘアが残されているだけで、綾乃の恥丘は無防備に晒されている。

綾乃がこれを見たらどんな反応を見せるのだろう。それとも説明の段階で、ここまで処理をすることを了承済みなのだろうか。

「Iラインに行きますね」

「はい」

「力を抜いてくださいね」

亜沙美は綾乃の両足を開くと、膝を立たせて、婦人科の診察でも受けるかのような格好にさせた。

綾乃の膝が少し狭まる。

「奥さん、それじゃあ脱毛できませんよ」

「は、はい……」

綾乃の膝がゆっくりと開いた。

亜沙美は、綾乃の両足の隙間から顔を入れ込んで、ペンシルのような器具を当てた。

「奥さん。少しの間、両膝を抱きかかえてもらえますか？」

「膝をですか？」

「足の長い方ですと、そうして貰わないと上手くいかないんですよ。プロのモデルさんには、みんなそうしてもらっているんですよ」

「膝って、どうすれば……」

「旦那さんとエッチをするときに、膝を抱えてって言われたことはありませんか？」

「……ないです」

修二は言ったことがあった。しかし綾乃はやってくれなかった。

「それじゃあ、ちょっと失礼しますね」

亜沙美は、綾乃のお尻を少し持ち上げるようにすると、

「膝を曲げてもらえますか？ そう、ここに腕を回して抱えててください」

と、綾乃の外性器を露わにした。

それは天井カメラでもハッキリと見えた。黒々した茂みの中に明らかにワレメが確認できる。そしてその中心には、ピンク色のそれも微かにだが見えた。

亜沙美の頭で綾乃の大事な部分が隠れた。亜沙美の頭の位置を見ていると、まるでクニリングスをしているかのようでもある。

時計が進んで十分も経過したころ、亜沙美が離れた。

綺麗に処理をされた綾乃の小桃がそこにあった。肌色の大陰唇が微かに口を

開け、その中から微かに小陰唇が飛び出しているのがわかる。大陰唇の半分程からお尻にかけては、いまだヘアが残っていて、それが余計に淫靡に見えた。

「次はIラインの後半部分と、Oラインになりますね」

「はい」

綾乃は慌てたように両ひざを開放し、足を閉じた。

「うつ伏せに寝てください」

「はい」

綾乃は、まるで魔法に掛かったかのように、亜沙美の言いなりに動いた。

「お尻を持ち上げますね。四つん這いになってください」

綾乃は無言のまま、四つん這いになった。

「胸はベッドに付けてください。あと足も少し開いてくださいね」

亜沙美の手が綾乃の背中を押さえつける。身体の柔らかい綾乃は、ぺったりとベッドに胸が付き、おしりだけが持ち上がっている格好になった。

「では失礼しますね」

光脱毛のペンシルが、綾乃の局部に当てられた。

少しずつ上へと上がっていき、肛門のところまでくると、亜沙美の手がお尻のワレメを開くように動いた。

綾乃の身体がわずかに反応した。

「動かないでくださいね」

亜沙美は事務的な口調で言いながら、もくもくと続けている。

「はい、お疲れ様でした。また仰向けでお願いします」

「はい」

「脱毛したところに、お薬を塗りますね」

霧吹きのようなもので、亜沙美は綾乃の下腹部にスプレーした。

「失礼します」

亜沙美の手のひらが、綾乃の恥骨を撫でた。次にワレメ付近から大陰唇、そして肛門へと進んだ瞬間、綾乃の身体がよじれた。

「くすぐったかったですか？」

「いえ、ちょっとびっくりしちゃって……」

「ごめんなさいね」

「いえ……」

綾乃は口元に手を当てている。まさか肛門を刺激されて感じたのだろうか。

「さっきの脱色素クリームも塗りますね」

「えっ？」

「これはバストトップとセットなんですよ。大丈夫です。顔は写しませんから」

亜沙美はそう言うと、綾乃の返事も聴かず、さっとデジカメを手にとって、綾

乃の局部を接写した。

綾乃はあきらめがついたのか、何も言わずただじっとしている。

すると今度は、いきなり綾乃の大陰唇を指で押し開いて、そのまま接写した。

綾乃はあきらかに困惑した表情をしているが、何も言わない。

亜沙美はクリームを手にとると、綾乃のVラインに塗った。

さらに薬を指にとると、再び綾乃の大陰唇を指で押し開いて、その中にまで塗り込んだ。

「そんなところまで塗るんですか？」

「もちろんです。ここが一番の女性の悩みどころなんですよ。奥さんのはきれいですけどね。あ、そうだ。特別にこれを見せてあげます。でもスタッフのみんなには内緒でね」

亜沙美はいったん奥へ消えると、再び現れて、写真のようなものを綾乃に手渡した。

「こっちの黒ずんでいる方が使用前で、こっちのピンク色の方が使用后です」

「こ、これって他人に見せてもいいんですか？」

「これは大丈夫です。だって、これは私のモノですもの。人様に使う前に、まずは自分でテストをするのは基本ですよ」

「……こんなに違うんですか」

「このクリームは私が知っている中では最上級ですね。もちろん、効果には個人差がありますけどね」

亜沙美はそう言うと、綾乃から写真を取り上げて、再びフレームアウトした。

「ところで奥さん」

「はい」

「さきほどクリームを塗った時なんですけど、何も感じなかったですか？」

「えっ？」

「普通は多かれ少なかれ感じちゃうものなんですけど、奥さんは無反応だったの」

亜沙美が言い終わってから、少し間をおいて、綾乃が重く口を開いた。

「正直言うと、わたしはそれがよくわからないんですよね。……感じるってどういうことなんでしょうか」

「やっぱりそうでしたか。奥さん、それって不感症って言うんですよ」

「不感症……ですか。それって病気なんですか？」

「きっと大丈夫ですよ。ちゃんと治療器具もありますし、奥さんはとてもラッキーです」

「どうしてですか？」

「そういう器具のモニターもあるんですよ。不感症の人って珍しいから、治験者

が滅多に見つからないんで、報酬もそれなりに出ますよ」

「不感症って、つまりはエッチの時の話ですよ？」

「そうですね。エッチをしても感じない事です」

「わたし、あまりエッチが好きじゃないので、別にこのままでもいいんですけど……」

「ええっ！ 女性の喜びを知らないだなんて、奥さんは不幸ですよ」

亜沙美の驚き方は、見るからにオーバーだ。

「そうですか？」

「エッチをするかしないかは奥さんの自由ですけど、せめて女性の喜びを感じることができるかどうかは、やってみましょうよ」

「でも……」

「絶対その方がいいです。ちょっと待ってくださいね。せっかくだから持ってきます」

「えっ？ 今やるんですか？」

「今やらないと、他のスタッフに奥さんが不感症だってばれちゃいますよ。これは、亜沙美と奥さんの二人だけの秘密です」

ガタゴトと音がする方を、綾乃は不安げな表情で見つめている。

「三種類ほどあるので、全部試してみしましょう」

亜沙美がフレームインしてきた。カゴを持っていて、その中には大人のオモチャが見える。

ベッドに正座して座ると、

「奥さん、また両膝を抱えるようにしてもらえますか？」

と言って、綾乃の両足を持ち上げ、膝を抱えさせた。

恥丘の部分に申し訳程度に残っているヘア以外は全て処理されており、綾乃の性器がハッキリと確認できる。

「もしも痛かったら言ってくださいね」

「ほ、本当にするんですか？」

「するんです。はい、力を抜いてくださいね」

亜沙美が手にしているのは、先端が流線型のバイブだ。

一時停止をしてサイトで調べると、Gスポットを刺激するタイプのものらしい。

亜沙美はバイブにローションを塗り込むと、バイブで綾乃のワレメを何度か往復させた後で、ついに秘肉を割って挿入した。

ブブブブっと低い音がエステルームに鳴り響いている。

「どうですか？」

「……特には何も」

「これならどうですか？」

いつの間に用意したのか、ローターで綾乃のクリトリスを刺激した。

「くすぐったい感じです」

「これで、これならどうですか？」

今度はバイブを大きく動かして、何度もピストンした。

「中で動いている感覚と、お腹まで振動が伝わってきていますが……」

「ただそれだけ？」

「はい、それだけです」

「わかりました。じゃあ次のやつにしましょう」

亜沙美が手にしたのは、ペニスをかたどったディルドと呼ばれるものだ。

それを綾乃の秘肉にあてがうと、ためらいもなくズブッと挿入した。

「あっ」

綾乃から微かな声が漏れた。

「気持ちいいですか？」

「なんでしょう。何かが奥で当たる感じがします」

「これですか」

亜沙美がディルドを上下に動かした。

「それですね。でも、気持ちいいとかは無いです」

「じゃあ、最後のやつではどうでしょうか」

亜沙美がディルドを抜き取ると、ローションなのか綾乃の愛液なのか、一筋の糸が光った。

三つ目のバイブの形状は、独特な物であった。太くなった先端は鋭角に曲がり、そこには三本の小さな突起が付いている。

左手で綾乃の秘肉を左右に開くと、特殊バイブをゆっくりと挿入した。

スイッチを入れ、グイングインとうなり声を上げると、綾乃の身体がピクンと動いた。

「感じます？」

「感じるとかはわかりませんが、これが一番くすぐったいです」

「このタイプが一番期待が持てるみたいですね。もう少し続けたいんですけど、時間が無いのでまた後日にしましょう」

「はい……」

亜沙美が特殊バイブをヌプッと抜き取ると、太い粘液が光った。

「あ、そうだ。奥さんこれはどうですか？」

亜沙美が手にしているのは、ハンディマッサージャーだ。

それを綾乃のクリトリスの部分に押し当てると、

「あ、だめ、だめです。くすぐったくてだめです」

と、綾乃は抱えていた膝を伸ばして、手でマッサージャーを遠ざけてしまった。
「今日は良いデータが取れました。奥さんの不感症は治ると思いますよ」
「そうですか？」
「治験者が見つかったことをメーカーに報告すれば、もっとたくさんの種類のもを送ってもらえるので、奥さんの身体にあったものを探しましょう」
「本当にやるんですか？」
「やるべきです。それに、もう三本も使っちゃったんですから、やらなきゃだめですよ」
「そ、そうですか……。そうですよね」
綾乃は唇に手を当てて、自分に言い聞かせるように言った。
ここで映像が終わった。
ついに綾乃の一糸まとわぬ姿が、篠塚たちに見られたのかと思っただけで、修二の股間は熱くなった。
それだけではない。ヘアは卑猥に処理をされ、おまけに大人のオモチャまで使われているのだ。
他人とて、下手なAVよりも興奮するだろう。
又きたい場面がありすぎて、結局修二はこの先の展開を想像して果ててしまった。

翌日の仕事が終わりに、会社を出た瞬間に電話が鳴った。篠塚だ。
『もしもし』
『もしもし、篠塚です。お渡ししたいものがあるので、仕事が終わったら会えませんか』
『今ちょうど帰るところです』
『それはちょうどよかった。そちらの会社の近所にサクラマートってあるのはご存知ですか？』
『ええ、知ってますが』
『いまその駐車場にいますので、来てもらえますか？』
『わかりました』
『急がなくても大丈夫ですから、ゆっくり歩いてきてください』
『はい』
修二は、すでに足早になっていた。
駐車場へ着くと、電話が鳴った。
『もしもし、右の車です』

振り向くと、ありふれた乗用車の運転席から、篠塚が手を振っていた。

「この車なら目立たないでしょう？」

修二が後部席に乗るや否や、篠塚が言った。

「あの真っ赤なスポーツカーは目立ちますね」

「そう思って、今日はこちらにしました。では出発します」

篠塚が車を走らせた。

「どちらへ向かうんですか？」

「ただ走らせているだけです。ダッシュボードを開けてください」

修二がダッシュボードを開けると、玉付封筒が入っていた。

「その中にはDVDが入っていますので、あとでじっくり楽しんでください。まあ、中身は画像ですけどね」

「ありがとうございます。見たかったんですよ」

修二は鞆の中に大切にしまいこんだ。

「宇海さん」

「はい」

「奥様には二泊三日の旅行に行ってもらおうと考えているんですが、問題ありませんか？」

「ええ、妻が承知しているのなら大丈夫です」

自分で賭けをした時、下着撮影までで止めると決めた。

頭の中では、ここで終了を告げなければいけないと思っているのに、続きが見たいという好奇心には勝てなかった。

「二泊三日の間は、奥様とは連絡も取れませんが、それでも大丈夫ですか？」

「どういうことですか？」

「旦那さんの声を聴くと、現実に引き戻される傾向にあるんです。また、何かの選択に困った時、旦那さんに相談されるのも困りますので、モニター商品の情報流出防止の名目で、携帯は一時預かることになります」

「妻がそれで良いと言うなら、大丈夫です」

「ありがとうございます。来週か再来週には決行の予定ですが、ドキドキ感を楽しんでいただきたいので、日にちが確定したら奥様にだけ伝えますね」

「わかりました。よろしくお願いします」

心臓がキューッと締め付けられた。

また別の興奮が、修二の全身を駆け巡っていた。

篠塚が会社を立ち上げるとき、ひとつの大きなプランがあった。

それは、超一流企業の商社マン時代に培った、各企業のお偉方とのコネを利用して、会員制の秘密倶楽部を作ることだ。

寝取り系のハメ撮りDVDを作ると言っても、それほどたくさんの依頼があるはずもないし、一人から取れる依頼料には限度がある。

虎の子の一件の依頼から大金を得るには、上質の観客を得ればいいのだ。

ここで最も懸念しなければならないのは、情報の流出である。

秘密倶楽部の存在や、その倶楽部に所属している事、そしてDVDの存在。これらは会員以外の誰にも知られてはならない。

会則は厳格にし、倶楽部に所属する者の力を合わせて、違反した者は徹底して社会的に葬ると宣言した。

特に気を付けなければならないのはDVDの存在で、映像そのものが証拠となってしまう。

そこで、大学の後輩で、技術工学の道に進んでいた笹本に声を掛け、DVDプレーヤーの改造を依頼した。

DVDの一枚一枚に、それぞれ会員ごとに異なった信号を埋め込み、専用のプレーヤーでなければ再生できないようにした。

さらには、再生中にのみ撮影状態になる小型カメラを内蔵し、DVDを見る様子を篠塚の会社に送信するという仕組みも作った。

自慰行為を見られることにもなるこのシステムは、会員には受け入れられないかとも思ったが、最初に集めた七名の会員からは、秘密を守るためには必要な事だと理解が得られ、中には、その映像は女性スタッフのみが確認すると聞いて、むしろ興奮すると喜んだ者までいた。

初めての依頼者は五十歳であったが、会員たちは一枚十万円のDVDをポンと買った。

初期メンバーは、篠塚が最も信頼できる七名であったが、これでいけると確信して、次に信用のできるお偉方に慎重に声をかけ、会員を二十名にまで増やした。

これを機に、活動名のエンタラップカンパニーの頭文字を取り、“援助する虎たちが集まる倶楽部”という意味も持たせて、『援虎倶楽部』と命名した。

また、メンバーからの紹介も受け付けることにした。

援虎倶楽部の事は一切口にせず、篠塚と三人で食事をし、のちに篠塚が二人だけで会って、被紹介者の素性或性格を探った上で、合格なら篠塚が入会を勧める。

これでメンバーは三十名にまで膨らんだのだが、統制が取れにくくなることを懸念して、いったん募集は終了とした。

三百万円の利益を得た篠塚は、会社事務所を新設した。

その際、スタジオを設けて、更衣室とトイレには盗撮カメラを仕掛けた。

後付けではなく、建設時に全て計算の上で設置したので、そこにカメラがある

とわかっていても、見つけることができないほどの完璧なものだ。

無名のレンタルスタジオへは、テレビに出るような有名人こそやっってはこなかったが、無名のグラビアアイドルや、スーパーのチラシで使われる衣類の撮影、または一般人のコスプレ撮影会などで利用され、その着替えシーンやトイレ盗撮のDVDも会員へ販売できるようになり、収入は安定していった。

また、プロジェクトコンサルティング社に所属する社員の多くが、元商社マンという事もあり、援虎倶楽部のメンバーの紹介で、コンサルティング業の仕事まで入ってきた。

さらに収入は安定し、波に乗ってきた頃、援虎倶楽部のメンバーから、自分たちも撮影に参加したいというリクエストが出始めた。

そこで、参加希望のメンバーには性病検査を義務付け、以後、リスクのある性交を一切禁止として、万が一メンバーが原因でターゲットを病気にしてしまった場合には厳罰に処す、と会員規則に加筆することを条件に、参加制度を設けた。

参加者は、ターゲットの女性がもとより承知の上であれば、完全抽選で選び、それ以外の場合では、岩木が寝とって完全に虜にした状態で、3Pの仲間として参加させた。

参加料はオークション形式で、おおよそ三十万円前後で落ち着くことが多かったのだが、ターゲットの年齢や容姿によっては、五十万円の高値が付くこともあった。

今回のターゲットが、宇海綾乃という飛び切りの美人だと知ったメンバーは、篠塚が聞いてもいないのに、百万だの二百万だのという金額を勝手に提示してきた。

その中でも最もテンションが上がっていたのは、宇海修二が勤める会社の社長であった。

ずっと以前から綾乃には目を付けていて、修二をとてと羨ましく思っていたらしい。

その事を知った超大手企業のN物産の会長は、修二が勤める会社の社長に連絡を取り、修二に契約を取らせて社長経由で百万円を送り、金銭的に後押しをした。

この時点で投資をしても、それは実現しないかもしれない。

そのリスクを負ってまでも投資をした場合、チャンスがあれば一番に権利を有する。

初めての事態で、会則にあるわけではないが、篠塚はそのように考えていたし、おそらく本人もそのつもりであろう。

ついに綾乃が温泉旅館の取材に参加することが決まると、篠塚は早速、援虎倶楽部のメンバーにメールを配信した。

援虎倶楽部メンバー各位

今回のターゲット、宇海綾乃の温泉旅館取材が確定しましたのでお知らせ致します。

さて、今回のターゲットですが、シンプルに寝取るという事は難しく、しかしながら、性に対して偏った知識を持っているため、それを逆手にとって、皆様にもご参加いただけるよう計画を立てております。

満足とまではいかないかもしれませんが、ゲームと思って楽しんでいただければと思います。

参加費用は三十万円です。

尚、先行投資されておりますメンバー様には、トップバッターの席をご用意しておりますので、ぜひ、ご参加下さい。

援虎倶楽部
篠塚和夫

参加希望の返信は早く、あっという間に三十名全員が参加を表明した。

あの日以来、綾乃がモデルとして出かけることは無かった。

一週間が過ぎようとした頃、修二が家に帰るなり、

「修ちゃん、来週の火水木って仕事に行ってもいい？」

と聞いてきた。

「仕事ってモデルの？」

修二の心臓が大きく高鳴った。震える足をまっすぐに立てようと意識した。

「うん、温泉旅館の特集記事の仕事だって」

「二泊三日で行くのか？」

「うん、火曜の朝に出て、木曜の夜に帰ってくるみたい」

「そうか。たまにはいいんじゃないか？」

「一応、OKはしちゃったんだけど、大丈夫よね？」

「愛里の事なら心配はいらないさ。なんなら母さんの家に連れて行ってもらうのもいいかもね」

「うん、お義母さんもそう言った。じゃあ三日も留守にするけど、よろしくね」

「ああ、三日間の独身生活を謳歌するよ」

修二は極めて平静を保っていたが、頭がくらくらするほど興奮していた。

火曜日の朝、綾乃は早くもワンピースを着ていた。

旅行鞆も玄関に置いてあり、いつでも出かけられる態勢だ。

「せっかくの温泉なんだから楽しんでおいで」

「うん。ごめんなさいね。わたし一人だけ楽しんできちゃって」

「たまにはいいじゃないか。ずっと母親だったんだから、息抜きもしておいで」

「うん。ありがとう」

「じゃあ俺は会社に行くよ。遠慮しないで楽しんでおいで」

「ありがとう。行ってらっしゃい」

綾乃に見送られて修二は家を出た。

愛里は昨日、母親が来て実家に連れて行った。

綾乃は今、日ごろのすべての束縛から解放されている状態だろう。

そして温泉旅行。

解放感が綾乃の貞操観念を緩くするかもしれない。

いや違う。貞操観念以前に、綾乃は性に興味が無いのだ。

寝取られたいという願望と、他の男に奪われたくないという嫉妬心が、今更ながらに葛藤している。

だが、もう引き返せない。下着姿くらいまでならと考えたあの時、或いはこういう状況になるだろうことは、頭の片隅で思っていたのだ。

いまから二日間という長い日が始まる。

何が起きてどうなったのか。

それを知ることができるのは、三日後以降だろう。

会社では上の空。仕事など手に付くはずもなかったが、社長賞をもらったあの契約があるせいか、上司の誰もが修二の仕事に口を出すことはなかった。

真っ暗な家に帰るのは、四年ぶりくらいだろうか。

コンビニで買った弁当と、インスタントのカップみそ汁を啜るのもずいぶん久しぶりである。

ゆっくりと風呂に浸かって、スポーツ飲料水を片手に自室に入った。

パソコンを立ち上げてメールを見るが、やはり篠塚からのメールはない。

恐らくはスタッフ総出で温泉宿に行っているのだ。映像が編集されて届くは

ずもない。

今まさに、綾乃の身に何かが起きているかもしれない、という考えが頭をよぎるが、修二は意外に冷静だった。

この時点で焦れていては身が持たないという本能なのか、それともこういった状況に精神が慣れてしまったのか。とにかく冷静だった。

修二は、あの日篠塚から受け取ったDVDを、ようやく開封した。

綾乃が帰ってくるまでの二日間を過ごすために、すぐにでも見たい衝動を抑え込んで、この日まで取っておいたのだ。

早速パソコンに入れて読み取らせた。

一番目の写真は、普段着姿の綾乃だ。

修二が驚いたのは、その写真の鮮明さだった。

修二は写真に詳しいわけではないが、それがプロカメラマンの撮影によるものだという印象を強く受けた。

岩木は、ただでかいだけの男かと思っていたが、カメラマンとしての腕も、間違いなくプロ級のような

いつも見る綾乃だが、ポーズを取っているだけでも、ぐっとくるものがある。

ドレス姿に変わり、そしてあのミニスカートのドレスに変わった。

ローアングルからの撮影だが、きわどくも下着は見えなかった。

スポーツウエアになった。これは映像でも綾乃のクイコミがハッキリと映っていた。

写真ではそれを鮮明に映し出していた。くっきりとした一本線が、綾乃の産まれ付いた性器の位置を示している。

そしてY字バランス。その直後の写真では、これ以上ないほど深く食い込んで、真っ黒な太い一本線の始まりに、淫靡な皺を寄らせていた。

次は競泳水着だ。それがシャワーで濡れて完全に透けた写真に変わった。

写真では、綾乃のヘアの一本一本までを鮮明に映していた。

ビキニ、そして下着姿が終わると、綾乃のバストのドアップ写真が出てきた。

これはエステで撮られたものだ。修二の鼓動は高鳴り、手が震えだした。

一呼吸おいて、次のボタンを押した。

「ぐう！」

という何とも言えない声が漏れた。

ヘアが綺麗に処理された、綾乃のピッタリと閉じた女性器が鮮明に映されているのだ。

さらに次のボタンを押すと、亜沙美の手によって力強く真円にまで開かれた綾乃の秘肉が、画面いっぱい映し出された。

修二は、綾乃の性器をここまではっきりと見たことは無かった。

どんな色で、どんな形をしているのか、夫婦であるにもかかわらず知らなかったのだ。

しかしとうとう、それを目にすることができた。

修二はさらに、注意深く綾乃の性器を見つめた。

クリトリスは包皮に隠れているが、目で確認できるサイズである。

ラビアは小ぶりでほとんど黒ずんでおらず、全体的に形も整っていて美しい。

当然、この写真は篠塚たちも見ているはずだ。

綾乃は、そんな男たちに囲まれて、温泉旅館に行っているのだ。

そう考えるだけでも、股間がムクムクっと大きくなった。

修二は壮大に果てた。果ててまたすぐに次のティッシュを片手に、二発目を発射した。

長い長い二日間が過ぎ去った。

今日は木曜日。綾乃が帰ってくる日である。

予告通り、綾乃からの連絡は一切なかったが、篠塚たちからの連絡さえもなかった。

昼休みに牛丼を食べていると、ようやくメールが来た。篠塚からだ。

《夕方頃には奥様をお届けいたします》

素っ気ない一行だが、それがまた余計に事後を思わせて、修二の心臓を揺さぶった。

綾乃の顔が見たい。修二は定時に仕事を切り上げて帰宅した。

綾乃はまだ帰っていない。渋滞にでも巻き込まれて遅れているのだろうか。

黄昏に染まった家の中で、キッチンや洗濯機の前に立ち、綾乃の寝室にまで足を運んだ。

綾乃の匂いを感じたい。

ずっと綾乃を愛していたが、今はそれ以上に愛おしく思えた。

愛里が帰ってくるのは明日だ。今夜は綾乃をギュッと抱きしめたい。

セックスは拒絶されても、抱きしめることくらいはできるはずだ。

ただそれだけでいい。今夜はギュッと抱きしめられるだけで満足できるはずだ。

コンビニ弁当で夕飯を済ませ、さっとシャワーを浴びて自室にこもった。

篠塚たちとの始まりから、今日までの全てを読み返していた。

気が付けば、あっという間に時間が過ぎていて、八時を少し回っていることに気が付いた瞬間、玄関から物音が聞こえた。

階段から落ちそうになりながらも、慌てて降りていくと、ワインレッドのミニのワンピースを着た綾乃が、荷物を両手に持って玄関から歩いてきた。

「お、おかえり」

修二は、思わず声が詰まってしまった。

「ただいま。お留守番ありがとうね。お土産あるから食べて」

綾乃は、紙袋をリビングのテーブルに乗せると、寝室に向かった。

その後ろ姿を見て、薄く感じ取っていた異変が、強いものに変わった。

背中が大きく開いたワンピースなど、これまで綾乃は着たこともなかったし、うなじを露出するアップの髪型も初めて見た。

明らかに今の綾乃からは、艶っぽい『女』が感じられた。

——着替える時間がなくて、撮影衣装のまま帰ってきた可能性だってあるじゃないか。

そんな考えが、頭の中を横切っていった。

寝室から出てきた綾乃は、着替えもせずにそのままの格好で、丸めたバスタオルを抱えていた。

「楽しかったかい？」

「う、うん。楽しかったよ」

「撮影はどうだった？」

「うん。シャワー浴びてくるね」

話が噛み合っていない。

綾乃は決して嘘をつくのが上手ではない。何かあったと修二は悟った。

「何かあった？ 嫌な事でもあったなら遠慮しないで話してごらん」

「何もないよ。本当に楽しかった」

「綾乃」

修二が綾乃に抱き付こうとすると、綾乃は、

「ごめん」

と言って修二を突き放し、浴室へと消えて行った。

抱き付くことさえ拒絶された。綾乃に何があったのだろうか。

微かなタバコの残り香が、修二に強い不安を抱かせていた。